道求

第拾卷

第貳號

求道第拾卷第貳號目次

求道

◉悲歎述懷　講義　近角常觀

◉『教行信證』信卷三信釋　近角常觀

第五席

至心釋（永刼の修行）

告白

◉二郎は死して活躍せり　秦敏之

一　二郎の死

二　二郎に對する追懷

三　心機一轉

四　無常を感ずるは厭世にあらず　黄葉秋造

雜錄

◉無慚錄　近角常觀

講話

毎日曜午前九時　求道學舍（本郷區森川町一番地）

毎土曜午後二時　第二求道會（九段坂佛教倶樂部）

毎月二日午後七時　第三求道會（日本橋蠣殼町説教所）

求道　第十卷　第二號

悲歎述懷

聖人は常に悲歎述懷の聲を絶たれなんだ、實に聖人が悲歎述懷は御身を以て我等が罪を知らして下された御教化であるそして同時に其罪の我身を救ひまたふ大悲の御惠をしらして下さる仰である。誠に知ぬ悲哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づべし、傷むべし矣との御悲歎は如何にも痛酷骨身に徹する次第である。實に我等は愛欲の塊である、名利の奴である。身にあらはるゝとあらはれぬの區別こそあれ、他人の行は即ち私の行である、社會の現象は皆自己心内の反影である、自己の周圍は自己の鏡であり外界の出來事は我心の客觀化したのである。求道といひ、信仰といひ、知らず識らずの間に我身を飾るの看板となり、懺悔といひ、告白といひ、頭を下げるといふ頭を上げることになる。何處までも名聞利養はつきまとひ、愛欲五欲は身のあらんかぎり伴ふて居る。聖人が外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ、内に虚假を懷けば也と喝破せられたるは我等が罪惡煩惱の一塊肉に過ぎざることを根底的に宣告せられたる聖訓である。虚名の看板は下して仕舞ふがよい、殊勝の金箔は剝がすのが可い。聖人が耻づべし傷むべし矣と投げ出されたは他人の事ではない、私自身の身の上である。聖人が愚禿々々と自白して内愚外賢とまで痛歎されたのは如何にも悲歎の極である。かくまでの御悲歎ありてこそ煩惱狂亂の我等も聖人の御伴をすることが出來る。親鸞もこの不審ありつるに唯圓房同し心にてありけりと仰せられてこそ聖人の御手に引かれまゐらすることが出來るのである。嗚呼勿體ない、〳〵

聖人の悲歎は決して絶望の歎ではない、厭世悲觀の叫ではない、大悲の親心に滿足して頭の下つた懺悔である、所謂地獄は一定すみかぞかしの落ち心である。歎異鈔には、聖人の常の仰せには、彌陀の五刼思惟の願をよく〳〵案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと御述懷候ひしとをとある、嗚呼これ悲歎述懷の御心根である。我等の惡業煩惱が深重なればこそ大悲の胸

を傷めたてまつりて五刼永刼の御苦勞をかけたてまつりたのである。かねてより常に仰ぎたてまつりたる涅槃經の御文が一入ありがたい。曰く、如來は一切の爲に、常に慈父母を作りたまへり。當に知るべし諸の衆生は、皆是如來の子なり、世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふことは、人の鬼魅に著せられて、狂亂所爲多きが如し、實に我等が煩惱熾盛の有樣は人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如くである。而して之をみそなはす大悲の親心は亦鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如くにてまします。狂人走れば他の人も亦走る、我等が煩惱狂亂につきまとひたまふ大悲の親心は矜哀憐愍のために狂亂の體にてまします、かくまでの御慈悲ありてこそ煩惱狂亂の我等も救濟されて正體に立返るのである。五刼の御思惟も永刼の御苦勞も畢竟此狂亂の私をたすけたまふ如來大悲の御狂亂にてまします、實に不可稱不可說不可思議の願海是である。

如意の釋に此意味があらはれてある曰く、如意と言ふは二種あり、一は衆生の意の如し、彼の心念に隨ふて皆應に之を度すべし。二には彌陀の御意の如し、五眼圓かに照し、六通自在にして、機の度すべき者を觀そなはして、一念の中に、前無く、後無く、身心等く赴き、三輪開悟して、各益したまふこと同じからざる也と、衆生の意は實に煩惱の鬼魅に著せられて狂亂所爲多き心である。彌陀の御意は五刼永刼の御苦勞十刼已來御待兼の親心より種々に善巧方便したまふ思召である。此狂亂の我等の爲に種々善巧の御苦勞まします、よく〳〵案じみれば、天に踴り、地に躍るほどに、よろこぶべきことを、よろこばぬにて、往生はいよ〳〵一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへて、よろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねて、しろしめして煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等のかためなりけりとしられていよ〳〵たのもしくおぼゆるなりとの敎化全く我等が煩惱狂亂の所爲と、之をしろしめす如來大悲の煩惱具足の凡夫と呼びかけたまふ親心とを示したまふのである。實に阿闍世王の逆惡は鬼魅に著せられて狂亂の所爲である。而して之を救濟したまふ世尊大慈悲を以て御苦勞下さることも亦鬼魅に著せられて狂亂とも言つべき常識を超えたる超世無上の本願醍醐の妙藥である。

かへす〳〵も我等が頂かねばならぬとは、大悲の親心は私の罪惡の隅々より煩悶の奥底まで知り拔きて憐れみたまふ事

である、人逆境に沈淪し、苦悶の極に達するときは自暴自棄に流るゝものである。何人も我を傾解して吳れるものはない誰も決して自分を同情して吳れるものか、猶進みて言へば同情してほしくもない。人の心などは、とても〳〵喰ひ足らぬ。たとひ人が如何程可いと言ふて吳れても自分で可いと考へられない。他人の我を可いといふのは猶我惡しき點を知らぬゆゑかく買ひ被りて居るのである。若他まで我心の奥底まで知り拔きたらば必ず〳〵あきれはてゝ我を斥くるに違ひない。如何なる人の同情も如何なる慈悲の涙も自分の心の奥には屆かぬ心地がする、是實に逆境に沈淪する時の心持である。然るに茲に大に注意すべきことは大悲の親心には、かねて我等が心の底を知ろしめすことである、底の底まで見拔きたまふことである。大悲の徹底するは私の方より徹底するのではない、大悲の方より底の底まで徹して下さるのである。心の底を極め、惡の底まで知り拔き、地獄の底まで御身を落して下されて我等と座を同ふしての御慈悲である。私が苦しみたるとき、如何程御慈悲をきゝても人の同情をいたゞきても喰ひ足らぬことは自分と席を同じくし、境遇を同じくして察して吳れる人のないことであつた。兎角從來聞法の上に於て不徹底に陷る點は佛は惡くても助けて下さるといたゞくことである。畢竟ずるに惡しくても可い、惡くてもかまはぬといふ樣なる意味である。惡しくても可い、かまはぬと言はれたのでは實際問題に於ては喰ひ足りぬ。私とても決して好むで苦むものではない、たとひ夫で可いと言はれても煩悶は去らぬ、頭は下がらぬ。さればと言つて惡しきを去ることが出來るとは思はぬ、一點も回復することは出來ぬ。唯願ふところは私と境遇を同じくし、性質を同じくし、所作を同じくし、苦痛を同じくして、如何にも苦むも尤である。惡しきに違ひなけれども、其惡しき心の止まぬところが憐愍に堪へぬ。如何にも狂亂の所爲なれど其性質が可愛想である。鬼魅に著はされたればこそ其樣なことをするのである、煩惱の所爲によりてかくなつたのであると他まで境遇も性質も罪惡も煩悶も徹頭徹尾理解して而も見捨て下さらぬ人が欲しい。而して實に是が如來大悲の親心にてまします、聖人が信卷に難化の三機、難治の三病は大悲の弘誓を憑み、利他の信海に歸すれば、斯を矜哀して治し、斯を憐愍して療じたまふ、喩へば醍醐の妙藥の一切の病を療するが如しと仰せらるゝが實に此點である。此矜哀憐愍の思召が難有い、普通の病人でない、尋常の惡人

ではない、其病膏肓に入る點を診察し、其惡逆の心の奥底まで腐蝕して居るのを御承知である。而して猶あきれず斥けず我退て引き下がらんとする手を執りて涙を注ぎ、我墮ち來る地獄の底に座を同じくして哀愍攝受の御親心を披きて下さるのである。如何なる逆惡の私も其大悲に感泣せずには居られぬ。如何に邪見の氷で張りつめたる心も慈悲の春風には融けずには居られぬ。三塗の黑闇光啓を蒙るといふは實に此處である。如何にも我等は暗黑の暗黑である、されど御慈悲は其底の底、隅の隅まで見拔きて、あきれず、見捨てず、あはれみたまふ大悲大願にてましますときけば、今更ながら我身ながらあきれはてたる狂亂煩惱の我なれど大悲深重の御苦勞はかくまでとはあきれはてたる不可思議の大慈悲にてましますと唯々彌陀智願の廣海に歸入したてまつるより外ない。

大聖釋尊が阿闍世王を救濟したまふが實に此有樣が人生的に歴々とあらはれてある。先づ釋尊は阿闍世王の罪は如何にも重けれども自ら手を下して立所に殺したのでないによりて、猶重しとは言はぬと仰せられた、是罪は此上なき重きには違なけれども佛の大悲は之を以て重しと認めたまはぬのである。願力無窮にましませば罪業深重もおもからずである。特に其已前に阿闍世王が月受三昧の光によりて先病氣の治したるとき耆婆曰く佛は先づ王の身を治して心に及ぶと申された其時阿闍世王驚きて、然らば如來世尊は見えてやろうと念じて下さるかと言ひたるとき耆婆答て曰く、譬へば一人にして七子あらんに是子の中、病に遇へば父母の心平等ならざるに非されども、病子に於て心則ち偏へに重きが如し、如來も亦爾なり、諸の衆生に於て平等ならざるに非れども然も罪あるものに於て心偏に重し、放逸の者に於て佛則ち慈悲の念を生じ不放逸の者には心則ち放捨すとある、是實に佛智無邊にましませば、散亂放逸もすてられずである、此の如く佛の大慈大悲を以て阿闍世王の惡逆をも猶重しと認めずして猶進みて其罪をば佛自ら負ひたまふのである。曰く、王若し罪を得るならば我等諸佛世尊は亦罪を得べし、何んとなれば汝が父先王頻婆沙羅は常に諸佛に於て善根を種へたりき是故に今日王位に居することを得たのである、我等諸佛世尊其供養を受けざらましかば王たらざらまし、若王たらざらましかば、汝、國の爲に害を生ずることを得ざらまし、若し汝、父を殺して罪あるべくは我等諸佛も亦罪あるべし、若し諸佛罪を得たまふこと無くんば汝獨り如何んぞ罪を得んやと、是實に如來が阿闍世

王の罪は即ち我罪也と認めたまふたのである。是所謂牀を同じく境遇を同じくし、罪を同じくし、責任を同じくし、結果を同じくして、身を以て阿闍世を救ひたまふ如來の大悲にてまします、是釋尊の御言を以て仰せられてあるなれど全く阿彌陀如來の弘誓、若不生者の御思召である。若し衆生罪あるべくは我等諸佛亦罪がある。衆生が地獄へ落つるならば我も亦地獄へ墮つべきである。たとひ身を諸の苦毒の中に終るとも我行精進にして、忍びて終に悔みずと仰せられたは即此思召である、若し十方衆生我國に生ることが出來なんだならば正覺を取らずとの仰せである。我等を見捨てゝ正覺を取らずとの誓である、反面から言へば我正覺を取りたる已上は如何なる罪惡の者と雖、否寧ろ罪惡の者程之を矜哀憐愍して助けねばならぬといふ誓にてまします。而して此誓が成就したまひたが今日阿彌陀如來の自在神力にてましませば、十劫の古、正覺を取りたまひてより十方衆生に對して如何にして之を屆けんと思召して下さる御親心が若不生者の誓である。其誓あればこそ恰も弓の弦の張りたるが如く、御やる瀨なき親心は私共に屆いて下さるのである。和讃に若不生者のちかひゆゑ信樂まことにときいたり、一念慶喜するひとは往生かならずさだまりぬとある。此誓のやる瀨なき、はりつめたる親心の弓の弦にてはじめて信樂まことにときいたりと眞心徹到して下さるのである。實に若不生者の誓は衆生の罪を我罪とし、衆生の苦を我苦とし、私共のために身を捨て、血を注ぎ、肉を積み、飽まで私共に御慈悲を屆けて下さる、如來の御親心にてまします。實に是れ、世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふことは、人の鬼魅に著せられて狂亂所爲多きが如くにてまします。

猶進みて佛は前世の業報、過去の宿因を御說きなされて一朝一夕今世一生の事でないことを示された、即ち頻婆沙羅王が毘富羅山に遊獵して仙人殺害をしたことである、其時仙人終に臨みて曰く、我實に辜なし、汝心口を以て横に戮害を加ふ、我來世に於て亦當に是の如く還て心口を以て汝の命を害すべしと言ふた、是實に汝が頻婆沙羅王を殺したる宿業の有樣である、此宿業のあらはれとして此殺害が起りたのである和讃に曰く、頻婆沙羅王勅せしめ、宿因其期をまたずして、仙人殺害のむくひには、七重のむろにとぢられき、宿業なれば殺さずにおかんとすれど殺さねばならず、殺されずにおかんとすれど殺されねばならず。歎異鈔に所謂なにごとも心に

まかせることなれば往生のために千人殺せといはんにすなはち、殺しつべし然れども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり、我心のよくて殺さぬにはあらず、また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあるべしと仰の候ひしは我等が心のよきをはよしとおもひ、あしきをは惡しきとおもひて本願の不思議にてたすけたまふといふことを知らざることを仰せの候ひし也とあるは實に是である。狂亂の所爲を何人が爲さんと思ふものか、思はざるに之を爲すといふのか即ち鬼魅の著せられるのぢや、煩惱の所爲ぢや、それが皆宿業の催すところぢや、卯の毛羊の毛のさきにゐる塵ばかりも作る罪の宿業にあらずといふことなしてある。若し、願にほこりて罪を作るなれば夫も宿業の所爲である、此宿業を了達し、三世を徹鑒したまひて我等を憐愍まします大悲本願の不可思議を仰きたてまつるの外はない、否佛の方より矜哀善巧の御手を下して此宿業の我等を導きて下さるのである。唯々此御慈悲の下に感泣して宿業を慚愧するの外はない。

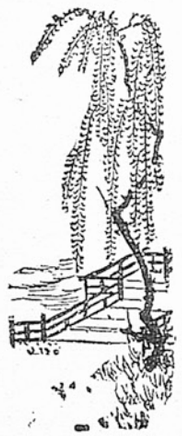
佛の仰は猶此に止らぬ、過去の業報のみならず、現在煩惱の鬼魅に著せられて狂亂して居る其心を憐みたまひて其狂惑を察して下さるゝ曰く、大王衆王の狂惑に凡そ四種あり、一には貪狂、二には藥狂、三には呪狂、四には本業狂なり、大王我弟子の中に是四狂あり、多く惡を作ると雖、我終に是人戒を犯せりと記せず、是人の所作三惡に至らず、若し還て心を得ば亦犯と言はず、王本國を貪して父の王を逆害す、貪狂の心のために作せり、如何ぞ罪を得んや、大王人の耽酔して其母を逆害せんと、既に醒悟し已て心に悔恨を生ずるが如し。是業、報を得ず、王今貪酔せり、本心の作せるに非ず若し本心に非ずば如何ぞ罪を得んや、と、實に如來の大慈悲は、かくまでも徹底して下さるのである、かくまでも深く我等の心を觀そなはし、知ろしめして飽まで矜哀憐愍して下さる、大慈大悲に遇ひたてまつりて見れば、不可思議なる哉、阿闍世王の心中、忽にして無根の信心開發して改悔懺悔の念止みがたい、曰く、世尊我世間を見るに伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭より栴檀樹を生ずるを見ず、我今始めて伊蘭子より栴檀樹を生ずるを見る、伊蘭子とは我身是なり、栴檀樹とは我心の無根の信也と仰せられた、實に不可思議なる哉無根の信があらはれた、無根とは我初め如來を恭敬することを知らず、法僧を信ぜず、之を無根と名く、世尊我若し如來世尊に遇はずんば、當に無量何僧祇劫に於て、大地獄にありて無量の苦

を受くべし、今我佛を見たてまつる佛を見たてまつるを以て得る所の功德衆生の煩惱惡心を破壞せしむと、是實に如來の大慈大悲を以て心中煩惱の賊を滅し、狂亂所爲多からしめたる鬼魅惡魔を退治して下されたのである。實に六趣四生の因亡し、果滅す、實に無明の酒を醒まし、三毒の毒を消し、永劫流轉の繫縛を解きたまふのである。佛言はく、大王善哉、善哉我今汝が必く能く衆生の惡心を破壞することを知れりと即ち本願圓頓一乘の醍醐は煩惱具足逆謗闡提悉く攝受して煩惱の氷解けて、功德の水としたまふことを信知せりと宣ふ、其時阿闍世王、告白して曰く、世尊若し、我審かに能く衆生の諸の惡心を破壞せば、我常に阿鼻獄にありて無量劫の中、諸の衆生の爲に苦惱を受けしむとも以て苦とせずと、固より地獄必定の我なれば、たゞ佛の御慈悲だにましませば、たとひ此御慈悲を衆生にしらすことが出來たらば、無量永劫地獄に落ちたりとも、さらに後悔はないとの覺悟である。是實に阿闍世王が全身を投出しての懺悔である。實に之が爲に摩伽陀國の人民悉く菩提心を起し、夫人後宮皆無上道心を發したのである。こは實に阿闍世王一人の救濟ではない、すべての逆惡のものを救ひたまふ如來大悲の實現にてまします。否大聖一代の御教化畢竟するに此の如き不可思議の大慈悲の外はない、實に如來入滅の時に當りて佛陀慈悲の無限無邊なることを顯示せられたのである。實に是れ涅槃醍醐の味て本願一乘の眞意である。

阿闍世王感謝して耆婆に語りて曰く耆婆我今未だ死せずして已に天身を得たり、短命を捨てゝ長命を得たり、無常の身を捨てゝ常身を得たり、諸の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめたりと而して此に初めて彼偈文があらはれてある、而して心底に徹到し大懺悔をせられた曰く、如來は一切の爲に、常に慈父母と作りたまへり、當に知るべし諸の衆生は、皆是れ如來の子なり、世尊大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふことは、人の鬼魅に著はされて、狂亂所爲多きが如し我今佛を見たてまつることを得たり、得る所の三業の善、願くば此功德を以て無上道に廻向せん、我今供養する所の、佛法及衆僧、願くば此功德を以て、三寶常に世に在さん、我今獲へきところの、種々の諸の功德、願くは此を以て、衆生の四種の魔を破壞せん、我惡知識に遇ふて三世の罪を造作せり今佛前に於て悔ゆ、願くば後に更造ること莫らん、願くは諸衆生と等しく、悉く菩提心を發せしむ、心を繫て常に十方一

切佛を思念せん、復願くば諸の衆生、永く諸の煩惱を破り、了々に佛性を見ること、猶妙德の如く等しからむと、實に是れ阿闍世王一人の懺悔てはない、我等煩惱狂亂のもの如來の大悲に過ひたてまつりて眞心徹到して改悔懺悔の心を告白して下されたのてある。聖人が濁世の庶類穢惡の群生、金剛不壞の眞心を求念すべし、本願醍醐の妙藥を執持すべしと仰せられたは是てある。而して此涅槃經の文の前に彼悲歎の文を冠せられたるを見れば實に此阿闍世王の懺悔は我等に代りて即ち聖人御自身の懺悔也と恐ながら仰ぎたてまつる次第てある、和讃に曰く、大聖おの〳〵もろともに、凡愚底下のつみひとを、逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり、古の玉舍城のことてはない、現代現時の事柄てある。現代他人の事てはない、現時私自身の事てある。この凡愚底下の罪人を底の底までかくまて身を沈めて救ひたまふ如來大悲の本願他力眞宗にてまします、實にいつまても〳〵ます〳〵罪の極、地獄の底に沈淪する我等てある仰くところは彌陀廻向の御名如來大悲の願船ばかりてある、聖人の晩年愚禿悲歎述懷讃にのたまはく

淨土眞宗に歸すれども　　眞實の心はありがたし
虛假不實のわかみにて　　清淨の心はさらになし。
外儀のすがたはひとごとに　　賢善精進現せしむ
貪瞋邪僞多きゆへ、　　奸詐もはし身にみてり。
惡性さらにやめがたし、　　心は蛇蝎のごとくなり、
修善も雜毒なるゆへに、　　虛僞の行とぞなづけたる。
無慚無愧のこの身にて　　まことのこゝろはなけれども
彌陀廻向の經なれば　　功德は十方にみちたまふ。
小慈小悲もなき身にて、　　有情利益はおもふまし
如來の願船いまさすは　　苦海をいかてかわたるべき。



講義

『教行信證』信卷三信釋

（夏季求道會講話）

近角常觀

第五席

「至心釋」（永劫の修行）

一

今席は前席前々席に續きて、『大經』の御文より初めます。

是以大經言。不レ生二欲覺瞋覺害覺一不レ起二欲想瞋想害想一不レ著二色聲香味之法一忍力成就不レ計二衆苦一少欲知足無二染恚癡一三昧常寂智慧無碍無レ有二虛僞諂曲之心一和顏愛語先レ意承問勇猛精進志願無レ倦專求清白之法以惠二利群生一恭敬三寶奉二事師長一以二大莊嚴一具二足衆行一令二諸衆生一功德成就。已上

爾下は法藏菩薩修行の有樣を、『大經』及び『如來會』て示されたる御文てあります。こは既に前席にもお話しせる如く、佛より我々の罪深く淺間しき樣を見て、其の者を遣る瀨無く、自ら菩薩の修行を爲し下されたる修行の有樣てあります。此の御修行ありて佛の遣る瀨無き大悲が、事實に現はれ下さるのてあります。既に前々席來丁寧にお話せる處故、能くお頂き下された事とは思ひまするも、先づ前々席來の大要は、我々人間は五分々々の世の中に、五分々々の事して暮して居るのが我々の有樣てある。此の五分々々といふ事は、我々の善きも惡しきも皆な五分々々て、先づ我々家庭にありては家庭て互に心を隔て、互に心のさぐり合ひを仕て居るのてある。「彼れには此の心がある」「誰れには此の思ひがある」と、互に心をさぐり、隔て合つて居るのが、即ち五分々々てある。夫れてあるのみならず「彼は斯く爲る故、我は彼に對し斯くせねば義理が濟まぬ」と、之が心に深く信ずる處ありて、絕對的に自分の所信の上より斯く爲るのては無くして、爲る事なす事、皆な「向うが斯く爲るから、自分は斯く爲なければならぬ」とやつて居るのてある。即ち我々は、善につけ惡につけ、常に此の五分々々につきまつわられて居るのてある。而して之が小なる家庭の間柄ばかりて無く、政治實業國際間の大問題に至る迄が、皆な之てやつて居るのてある。「相手が斯くするから、此方は斯く仕なければならぬ」、「向ふがあーするから、此方は斯う仕なければ自衞の道が立たぬ」「對手國があーするから、此方は斯くせねば、國際間の禮に背く」と、やつて居るのてある。斯く此の世て我々の爲る事なす事には一つとして絕對的のものは無い事となる。夫れ故爲ることは設ひ善を仕て居つても、夫れが眞の善て無く、作つた善てある、僞りの善てある。作善てある、僞善てある。又之が惡い

方となれば如何程でも惡しくなり、遂に自分が地獄に墮ちるも知らずにやつて居る。といふ事になるのであります。

そこで總て佛敎の上では之を業報と言ふ。――殊に『歎異鈔』の第十三章には、

よきこゝろのおこるも、善業のもよほすゆへなり。惡事のおもはれせらるゝも、惡業のはからふゆへなり。故聖人のおほせには、兎毛羊毛のさきにゐるちりばかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなしとしるべしとさふらひき。

我々の心に善き事の思はれせらるゝも、又惡事の思はれせらるゝも、皆な業報であるとある。處で我々此の業報を、今現在自分の仕て見やう無き有樣と氣づくて無しに、凡て業報で出來て來るのだから、仕やうが無い、となると、業報といふ意味が間違つて來るのである。業報とは今言ふ此の相對界の仕て見よう無き五分々々の有樣が、業報なのである。我々此の仕て見よう無き業報の五分々々の淺間しき根性が有り、夫れて我もやるから、人もやるとなつてあるのである。凡て佛敎で業報といふ事は、日々の家庭生活を始め、政治、實業、國家、國際關係、人間のする相對界の總ては皆な五分々々で皆な同じ事なのである。之で大體分ると思ひます。

一

處が其の業報に附き纏はれて、夫れから夫へと行くの故、實に切り無しである。相手の惡に連れられて、其上〳〵と行くの故、何處迄行きても、切り無しであります。其處で然らば其業報が何んとかして止まるかといふに、何うしても止まぬ。考へて御覽なさい。「自分は善く仕度いのであるけれども向ふがあーするから、此方も斯く仕なければならぬ」。「向ふは屹度斯く仕て來るに違はぬから、此方は斯く仕て行かねばならぬ」と、皆んなが先き廻はり〳〵して、互にやり合ひ、夫れから夫れへと纏つはられて動けぬやうになつて來て居るのである。之が銘々業報にまつはられて居るのであります。故に此の業報を我々自分の悟りの力で絶つ事が出來るなら、解脫が出來るのであるも、夫れは到底出來無い事となつて居るのである。

其處で佛の救ひなる事は何うかと申しますに、其の業報に閉ざされて脫れる事出來ぬ奴が可哀相である故、其の互に利益を取り合ひ、利欲の爭ひを仕て居る哀れなる有樣を佛の惠みより御覽下されて、「さて〳〵可哀相な事である、其の業報に繫がれ苦しんで居る奴を、業報より離し救ふには、其の業報の爲めに人を隔て憎んで居る其の業報の奴を飽く迄丸捨ずして、其の奴を救ふには五分々々の慈悲では駄目である……」一切諸佛の法はあれども、諸佛の救ひは矢張り、善を爲せよ修行をなせ、其者を救はんとの敎えなれば、如何せん我々には夫れては仕やうが無い。も一つ言へば、五分々々で苦んで居る世の中なれば、五分々々の法を以てしては、迚も其者には駄目である。夫では屹度「此方から善くさへ出來れば、向ふからも善く仕て下さる法である、夫れては我々には迚も出來ぬ」と、初めから捨てゝ仕舞ふに決まつてある。故に若しや玆に「衆生無邊誓願度」と、我々絶對に善くし、絶對に道を修する事が出來るならば、夫れは必ず善く成れるに決まつ

てるのである。即ち之が聖道門自力の道なのであります。即ち我々絶對に人に善く出來、最後迄無限に夫れでやりをはせる事が出來るならば、夫れは必ず解脫の境に到れるにきまつてるのである。が併し夫れが我々に出來るならよけれども、我々には出來ぬ。遇々善く仕たと思ひても、忽ちもとに戻り、五分々々の根性の何うしても拔けぬ我々である。眞に人に對し、飽く迄無碍に出來るならよけれども、夫れが到底我々には出來ぬ。故に親鸞聖人は、夫れが出來るならよけれども、出來ぬ故、遂に其の道を聖道權化と迄言ひ切つて、はね退けてお仕舞ひ下されたのであります。而して夫れが出來ぬ故、何うしても我々は五分々々を離れる事が出來ぬ。其の離れる事の出來ぬ、其の五分々々の止まぬ、飽く迄五分々々でやり拔いて居る夫れを御覽下されて、「さて〳〵其の者が可哀相である」と言ひかけて下されたのであります。故に佛のお慈悲を頂くに、我々は惡いけれども、佛の方より此者に善く仕て下さるのである」と、斯く言つて居るのでは、佛のお慈悲は分らぬのである。佛のお慈悲は、斯く私が五分々々の根性の止まぬ、夫れが哀れであると、私の其の五分々々の根性の根に向つて、夫れをば打ち碎いて下さるのである。故に一度び玆の處の遣る瀨無きお慈悲に氣がつけば「あー長々淺間しい事であつた。今迄是れ程迄の廣大の御哀れみとは氣が附かず、五分々々でやる外仕やうが無いと思うて居つたは、實に申譯なき事であつた」と、我々の五分々々の根性が、如來の廣大のお慈悲に囚へられ、初めて「あー惡かつた」と頭が下るのである。之れが眞にお慈悲が頂けたものであります。而して其の頂けたが、私の此方の力で頂けるにあらず、佛のお心が今言ふ廣大のお心でまします故に頂けるのである。之れが一昨日の席で申す、姨捨山の譬喩で言へば、「奥山に技折り〳〵は誰が爲めぞ、親の身すてゝ歸る子の爲め」とある歌の意である。親が自分の子供が哀れで仕やうが無いといふに、唯可哀相であるといふ丈けならば、子供は唯有難いといふ丈けであるも、子供は實は親を捨てに出かくる小供なのである。然るに親は其の捨てる子供が彌々可哀相て捨てられぬとあるお慈悲なのである。さればこそ、其の廣大なるお慈悲の爲めに「さては〳〵其の廣大の親心でましませしか」と、頭が下るのであります。

三

次第々々に當講話も進み、昨日如きは講話後大分お氣づき下されたる方も多いのである、夫れは前々席來御話する處を各個人々々に差し向ひて御話する時、多くの方が皆なお喜び下さるのであります。夫れは何うかといふに、多くの方が、人を不足に思ひ、人に心が隔たり、人生に行き當りて、何とも仕て見やうが無いといふ處へ、其の五分々々の根性で惱む心を能く知り拔かせられ「成る程汝が其の心で惱み苦しんで居るを我は能く知つて居る、如何にも汝には其の惡しき心がある、夫れを我は能く知つて居る。併しながら、其の惡るいからして、いかぬと言ふのでは無いぞ。其の惡るい心が在る故、我は彌々夫れを斥けず、夫れを益々不愍で哀む慈悲であるぞ」との眞の仰せが佛の仰せである事を聞かるゝ時、總ての人が信仰に入らるゝのであります。我々が自分の五分々々

の根性で、明け暮れ人と疑ひ隔て、苦しんで居る、其の我々の意中を殘らず見そなはせられ「其の汝の惱み苦しんで居るを、決してそれでも善いとは言はぬ、惡いことは實に何處迄も惡るい。實に慢高な仕て見やうの無き奴である。何處迄も淺間しき五分々々の根性の拔けぬ、ねじけ者の汝である。併しながら、だから其の汝を捨てるとは言はぬぞ、夫れが實に汝の本性である、汝の自性である。其の本性を持ち、其の自性を抱へ、迷ひ流轉して居る汝の夫れが可哀相で見て居られぬ故、我は其の爲め現はれて、長々苦勞を仕て來たのである。其の汝の爲めの親が、茲に疾うから待ち兼ねて居ると言つてるては無いか。」と呼びかけ下さるが佛の御聲であります。で一度び此の佛の御聲に氣がついた時は、恰も今迄善し惡しと人生にいさかひを仕て居た者が、突然横あひより如來に喧嘩を買はれた如く、又今迄人生の小さい五分々々でやつて居る處へ、いきなり背後より大きなるもので、捕へられた形で、今迄人生で善し惡しと、「鐵葉の缺け」の取り合ひを仕て居た者が、「汝夫れは鐵葉の缺けでは無いか」と言はれても、「いや缺けでも人が取る故自分が取らんならぬ」と苦しんで居るのであるが、耻しや無限大悲の佛は、私が實に人生に斯くの如き事を仕て居る、其の淺間しき事仕て居る其者が哀れとの遣る瀬無きお恵みと承はり、「さても〳〵長々此の爲めに御心配をかけまつり、此のお慈悲を頂く事を仕なかつたのであるか、申譯が無い」と氣のついた一念に、今迄の他の物は凡て手より離され、唯廣大の南無阿彌陀佛の御慈悲ばかりとなるのである。故に佛のお慈悲は、私が惡い心がある、淺間しき思ひがあると歎いて居る間は、まだ眞にお慈悲が頂けたものでは無いのであります。

四

そこで本文今席の處になり、私が斯く五分々々に附き纏はれて淺間しき事ばかり仕て居る。無始より已來、今日今時今の時に至るまで穢惡汗染にして、清淨の心無く、虛假諂僞にして眞實の心といふものは微塵も有る事が無い。其の哀れなる樣を御覽下されて、佛が其の私の爲めに不可思議兆戴永劫の御修行を爲し下されて、あなたの身も口も意も清淨眞實の御まこと心の塊りで、私に廣大の御慈悲を廻施して下さる。其の法藏菩薩御修行の有樣であるとて、『大經』の本文をお示し下され、即ち

『是を以て大經に言はく、欲覺瞋覺害覺を生せず、欲想瞋想害想を起さず。……』

之が私が日夜欲覺瞋覺害覺を起してるもの故、夫れを御覽下されて、夫れが實に可哀想であると、我々が欲を起すを見ては欲の心を起さず、我々が瞋りに狂へるを見ては其の者を助ける爲めにと瞋りの心を起さず、害の心を起さず、欲想瞋想害想を起さずである。即ち私か色々惡しき心を起して人生に惱み苦しんで居る、其の私の一々の淺間しき心を御覽下されては、其の者の爲めに、夫れに應じて三覺三想をお起し下されぬのである。故に茲は、我々は斯く欲覺瞋覺を起すも、佛は起されぬといふのでは無く、私が斯く欲瞋煩惱を起すを見て、夫れが實に不愍であると、其の私に向ひこの遣る瀬無きお慈悲の上よりの御修行なのである。故に我々此方の方には

欲覺害覺あるも、佛の方には夫れが無い、といふやうに茲を手輕く思うてゝは、大間違ひである。此方が罪惡を起せば起す程、彌々涙を以て向うて下さる大悲の御修行なのであります。次ぎには

『……色聲香味の法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず。少欲知足にして染悲癡無し。三昧常寂にして智慧無碍なり。虛僞諂曲の心有ること無し。――』

色聲香味の法といふは、即ち色聲香味觸法の六塵である。佛が我々の爲め其の御苦勞を仕て下された有樣といふものは、少時の間と雖も此の六塵の汚れに執着して下されたといふ事なく、忍力成就して、如何なる艱苦にも甘んじて耐え忍び、如何なる衆苦をも、苦として下されぬ。又少欲知足にして。一點の欲も起させられず、全く貪欲瞋恚愚癡の三毒を離れて御苦勞を爲し下された。又三昧常寂とあるは、三昧は定である、佛の衆生を知召し下さる靜かなる心である。其のお心常に靜寂にして、智慧無碍て有つた。又虛僞諂曲の「うそ」「僞はり」「へつらひ」の心が更に有ること無つた。といふは、之も前々より言ふ如く、私が虛僞諂曲の塊りの奴であるからである。我々は虛僞諂曲は或特別の場合に起す淺間しき心にして、常には然うして居ぬと思ふてるのでありますも、人に厚意を持てば忽ち「へつらひ」に陷り、人に親切を起せば虛僞に落ち込み、我々の爲る事なす事は、常に虛僞諂曲を離るゝ事能はぬのである。其の爲め夫れを哀はれみて、大悲の佛は斯く御苦勞を爲し下されたのである。斯く茲の處、總て佛と我々と裏腹になつてある處を能く頂かねばならぬのであります。姨捨山の喩えて申せば、親の道しるべは、親の爲めの道しるべて無い、我々親を捨てる惡しき子供が不愍なばかりに、親は道しるべをして下されたのである。『和讃』には

諸佛三業莊嚴して、　畢竟平等なることは、
衆生虛誑の身口意を、　治せんがためとのべたまふ。

一切諸佛が平等に身口意の三業を莊嚴して下されたは、諸佛は我々と離れて勝手に莊嚴して下されたのでは無い。即ち「衆生虛誑の身口意を、治せんが爲とのべたまふ」。我々身を動かせば僞りを行ひ、口を開けば「うそ」を言ひ、意に常に惡を思ふ。然ういふ處の淺間しき私である。其の私故、其の私を哀れみて、其の私の心を根治するが爲め、私が惡を起せば起す程彌々清淨眞實に仕て下さる佛の御苦勞であると、御知らせ下さるのであります。又次ぎには

『……和顏愛語にして意を先きにして承問す。……』

我々は常に荒き姿、荒き言語を以て、利己主義のがち〳〵で自分の淺間しきを忘れて、振舞つて居るのに係らず、佛は常に此の者に優しき顏容、優しき言葉を以て向ひ、常に衆生の意のある處を知つて、其の者の意を先きにし、其の者の心に應じ、其の者の意に添うやうにして、氣がつく迄他く迄お導き下さるといふのである。之なども、私の罪業の淺間しきと佛のお慈悲の廣大なるとを、別々に仕て置いてはならぬ。夫れては佛の遣る瀬無き救ひといふ事が無になつて仕舞ふ。私が斯く五分々々で、常に人に反抗の心を抱き、容易に人の親切なる言葉を受つけぬ。其の頑迷度し難き奴であるばかりに、彌々夫れが不愍と益々其者に廣大なるお心で向つて下さるの

てある。所謂『御傳鈔』で親鸞聖人に反抗する辨圓が聖人の御前に出た時、

聖人左右なくいであひたまひけり。すなはち尊顔にむかひたてまつるに、害心たちまちに消滅して、あまつさへ後悔の涙禁じがたし。云云。

聖人を殺さうと思うて出て來たのに、聖人が「さて〳〵可哀相である、そんな心ではいかぬ、人を敵と見るでは無いぞ」とある優しき廣大のお心を以て向つて下されたのである。其の廣大の御心で向つて下さればこそ、如何に頑強な辨圓も、ひと目尊顔に接するなり、立所にお慈悲に融かされて仕舞ふに至つた、といふのが實に茲であります。

五

そこで前席にも言ふ如く、釋尊のヂャータカは、釋尊の前生の御修行の有樣で、釋尊が「前生に於ても此の姿で汝を救うた」と言はるゝヂャータカの御教化は、要するにあなたが前生に於て、身命を捨て私の爲め〳〵と仕て下されたあなたの御修行のお姿である。即ち毖婆往來八千度びも、皆な私共に此のお慈悲を知らする爲めの御苦勞に外ならぬのであります。而して其の根本の大根本たる阿彌陀佛の御修行が、今ある法藏菩薩の御苦勞なのである。處で此の御文なども「佛は斯く仕て下された故我々も之を手本とし、之に愧ぢて善く仕て行かねばならぬ」となると、自力修養になる。茲はうつかりすると誰でも然うなる處故、然うならぬやうに能く注意仕なければならぬのである。茲は我々が然う出來るなら善けれども、其の反對に、我々は惡いこと〳〵と仕て居る、其者に向はせられて遣る瀨無き大悲の上より御修行なのである。故に此方は斯く反對な事ばかり仕て居るに、其の者に向はせられて斯くの如き廣大のお慈悲と頂き、「申譯無し」と頭の下る一念が肝腎であります。又中には、「此方は如何に惡いことするも、向うから善く仕て下さるお慈悲である、其の爲めの法藏菩薩の長の御修行では無いか。故に佛の方より善く仕て下さるの故、此方は何程惡しくてもよいのである。」と斯ういふ風に考へて居る人が、說敎を聞き慣れて居る人の中には往々ある。之では結局「向ふは何程でも善く仕て下さるの故、此方は如何程惡いこと仕てもよい」、といふ事になり、お慈悲といふ事が薩張り頂けて居ぬのである。之では餘り身勝手過ぎるのであります。茲は「善く仕なければならぬ」と力むでも無ければ「惡しくてもよい」といふも間違ひである。兩方とも何れもいかぬのである。子供が道樂しても、親は自分の爲め貯めといて下された金なれば、何程費つても構はぬとなつては、親の親切は何もならぬのである。處が又「汝の親は國許て汝の事を大變心配仕て居られる」と聞いて、「親が心配仕て居るそうだから、之から善く仕なければならぬ」となつても中々其通りに行へぬのである。處が茲に「汝うか〳〵と仕て居るも、親は國許て汝の身を心配して一刻も汝を忘れず、夜ふけ迄汝の爲めを思ひて自から機を織り、自から仕立て〻送られた一枚の着物であるぞ。親は汝の惡い事をすつかり知り拔かれ、其の仕て見やう無き汝に着せんばかりに、選りに擇つて其の一枚の着物を作られたのであるぞ」と、之を明かされた一念には、「之では濟まぬ」では無い、「あゝ夫れ程迄とは思はざりしに、斯く迄廣大の御親切であつたか」と、ぢつと仕て居るに居られ無くなり、其の廣大の御親切を聞く一念に、止めんと努めて道樂を止めるので無く、聞く一念に「さては〳〵其の遣る瀨無き大悲なりしか」と、今迄の心がころりと一遍に代はつて仕舞ふのである。其の代はるは自分で代はるに非ず此の廣大の親心を聞かせて貰ふた一念に一時に融けて仕舞ふのである、滅んで仕舞ふのであります。故に親鸞聖人の御示しが、皆な之れである。例へば『和讃』では、

本願圓頓一乘は　逆惡攝すと信知して、
煩惱菩提體無二と、　すみやかにとくさとらしむ。
無碍光の利益より、　威德廣大の信をえて、
かならず煩惱のこほりとけ、　すなはち菩提のみづとなる。
罪障功德の體となる、　こほりとみづのごとくにて、
こほりおほきにみづおほし、　さはりおほきに德おほし。

「罪障功德の體となる」など〻、當り前て我々の惡が功德などになるものか。此の罪業の者を飽く迄捨てぬとの廣大のお慈悲の熱に懸るもの故、罪障の氷が解けて功德の水となるのである。「我々は氷である、佛のお慈悲は熱である、熱によりて氷を變じて水に仕なければならぬ」など、思うてるのでは駄目である。此の廣大のお慈悲の熱は唯の熱て無く、飽く迄此の私の氷を解かさうとの熱なのである。故に一念「此の氷の私を」と茲のお慈悲に氣がつく時は、如何な强情我慢の私も最早や我慢張りては居られず、「之はし、たり〳〵」と、氷が其の儘功德の水に解けて仕舞ふのであります。故に茲の處は私の罪障の深い處へ、佛のお慈悲の遣る瀨無さを直接に頂く事か肝腎である。喩へて言へば、襖一重隔て〻佛と我々と別々に在るのでは可かぬのである。世間の大抵の人が言はる〻のは、何うも襖一枚隔てた話故困る。多くの人は其の間に襖一枚の隔てが有つて、さうして「此のやうな仕て見やう無い者故、廣大のお慈悲である〳〵」と此方から佛に向ふてるのである。之ては、いつ迄やりても駄目である。又自分は惡い事仕て置いて「佛の方より此者を善くして下さるのである〳〵」と言つて居るのも、矢張り襖一重の隔てがあるからである。然るに私が斯く現に惡しき心を起し、色々自分で計つて苦しんで居る、夫れを御覽下されて、佛の方より襖を押し開き、飛び込んで「汝何仕て居るか」と言はれた時には、最早や善く仕て下さるも下さらぬも言ふては居られぬ、唯々お慈悲の廣大なるに感泣する外無いのである。凡て仕事は佛の方より仕て下さるのであります。

又次ぎには

『……勇猛精進にして志願倦むこと無し。專ら淸白の法を求めて群生を惠利す。三寶を恭敬し、師長に奉事して、大莊嚴を以て衆行を具足して、諸の衆生をして、功德成就せしむとのたまへり。(已上)』

其の我々の有樣を哀みて、大悲の大願を起し御苦勞仕て下さる有樣は、勇猛精進にして其の御志寸刻もゆるませらるゝ事は無つた。又淸白の法とあるは、善導大師の二河白道の白道と同じて、善法である。善法を白に名け惡法を黑に名くるのである。其の淸白の法を求めて、諸の群生を惠利して下された。又佛法僧の三寶を恭敬し、師長に奉事して、大莊嚴を

以て、諸ゆる衆行を具足し、有らゆる衆生をして功德成就せしめ下された、といふは其の長々の御苦勞遂に凝り塊りて萬行具足の一南無阿彌陀佛を御成就下され、之を衆生に廻施して下さる事を御說き下されたのである。是れ即ち先きに

『如來清淨の眞心を以て、回融無礙不可思議不可稱不可說の至德を成就したまへり。如來の至心を以て、諸有の一切煩惱惡業邪智の群生海に廻施したまへり。』

とある處である。總て玆の處は、佛が我々欲覺瞋覺害覺の惡しきを哀れみて、長々常に其者に附き添ふて、泣いて下されたる如來の至心迄を示し下されたのであります。

六

次ぎは、

無量壽如來會言、佛告阿難、彼法處比丘於世間自在王如來、及諸天人魔梵沙門婆羅門等前、廣發如是大弘誓、皆已成就、世間希有、發是願已如實安住、種々功德具足莊嚴威德廣大清淨佛土修習如是菩薩行、時經於無量無數不可思議無有等等億那由他百千劫內、初未曾起貪瞋及癡欲害恚想不起色聲香味觸想於諸衆生常樂愛敬、猶如親屬、乃至其性調順無有暴惡、於諸有情常懷慈忍心不詐諂亦無懈怠、善言策進、求諸白法、普爲群生勇猛無退、利益世間大願圓滿、略出

こは『無量壽如來會』といふは、今の『大經』の異譯の經である。此の經文を親鸞聖人は好んで御覽なされたと見え、始終此の御經を引いてお出になるのである。今も即ち前の『大經』法藏菩薩修行の有樣を重ねて斯の經によりてお示し下されたのであります。即ち殆んど『大經』の御文其の儘である。即ち玆に法處比丘とあるは、法藏菩薩の事である。其の法藏菩薩御苦勞の樣を御示し下されて、玆には何うあるか、といふに法藏菩薩、世自在王佛の御許に於て、廣く諸天魔梵等の八部大衆の前に於て、我々の爲めに大弘誓を發して皆な既に御成就下された。大弘誓といふは法藏菩薩の願は唯の願でなく、此の願滿足せずば正覺は取らぬといふ誓ひの附いてある願である。故に大弘誓と示されたのであります。して其發願後其の實の如く、長々の御苦勞を經て種々の功德具足して、威神力功德廣大の佛土を莊嚴して下された。して其の長々御苦勞の間といふものは、無量無數不可思議無有等々億那由他百千劫の間、初めよりしばらくも未だ曾て貪欲瞋恚愚痴の三毒の想ひを起し給はず、色聲香味觸法の六塵に着し給はず、我々衆生に對し、常に愛敬を施し慈愛して下さる事、さながら自己の親屬の如く、自分の子の如く親の如くして下された。又其の性非常に「すなほ」にして、曾つて荒々しき事仕て下された事なく、諸の衆生に向ひて常に慈忍の心を抱き、一點も「いつはり」「へつらひ」の心無く、亦懈怠して下さる事なく、常に善言を以て他く迄救々を白法に導き、毎に其の爲に勇猛にして、退いて下さる事無かつた。斯くして遂に一切世間を

利益する大願を滿足仕て下されたのであると、お示し下されたのである。即ち是れ先に言ふ。親が我々の爲め一枚の手織を作りて下さる有樣にて、一針運ぶにも親は「此の着物を子供に着せて遣り度い、」「一筋打つにも此の衣を纏はせて遣り度い」と遂に其の遣る瀨無き一筋の糸、一打の筋、一針の縫ひ目でも積り〳〵て立派なる親の手織の出來上がつて下された有樣である。即ち「何うかして〳〵」との遣る瀨無き此の御心配が、まとまり〳〵、永劫の御修行の結果、遂に若不生者不取正覺の御本願成就となつたのであります。

七

猶ほ之に就き法然聖人の『西方指南鈔』の中には、阿彌陀佛の本願と諸佛の本願と異なる處を說かせらるゝ處に「阿彌陀佛の本願には願と共に誓ひがあるが、諸佛には本願はあるも誓ひが無い」といふ事が說かさせられてある。例へば藥師如來には藥師如來て十二の願があり、何れも「衆生を斯う仕てやり度い」との願であるも、唯願丈けて「斯う仕果さねば措かぬ」との誓ひが無いとお示し下されたのである。之は唯金をやらうといふ丈けの金持ならば世間に澤山ある。岩崎は岩崎で難儀して居る者に慈善を施し度いと言ふし、三井は三井て三井病院を建て、或は濟生會などの設けもあり、遣る〳〵と迄言つて下さる人は幾らもあるのである。併しながら、「貧困の者に遣りおをせ無くては措かぬ、若し遣りおをせなくば金持とは言はれまい」といふ誓てあるとは、大きに趣きが違ふのである。「若し衆生が病氣本復を望むなら、本復させる」といふ願丈けであると、「其の者に他く迄言ひ聞かせ、此の我が親心を固けずば、親とは言はれぬ」とある誓ひであるとは、大に樣子が違ふのであります。處がそこが諸佛には願丈けである。猶ほも一つ言へば、地藏菩薩とか千手觀音とかの願には此の誓ひがある。誓ひはあるも此等の菩薩は、まだ佛となつてお出で下されぬ。例へば地藏菩薩にすれば、たとひ道行く人に蹈まれても、衆生を救はずば佛とは成らぬとの御誓ひであるも、まだ佛とは成つて御出て下されぬ、即ちまだ御修行中のお姿である。「金持ちとなりて救はねば措かぬ」といふ誓ひがあつても、肝腎の金持となつて、下さらねば何もならぬいてある。處が今阿彌陀佛には其の衆生を助け遂げずば正覺は取らぬといふ誓ひがありて、其の誓ひの如く今言ふ永劫の修行を仕て下されて、遂に其の誓ひが成就し正覺の阿彌陀佛となつて下されたのである。即ち『帖外和讃』には

四十八願成就して、　　正覺の彌陀となりたまふ、
たのみをかけし人はみな、　　往生かならずさだまりぬ。

即ち阿彌陀佛とは「助けねば措かぬ」との廣大誓願より、其の誓ひの如く長々助ける爲めの修行をなし、其の本願成就した處より、自然に現はれさせ待ち兼ね下さるお姿である。故に阿彌陀佛は阿彌陀佛ありて初めて我等をお助け下さるにあらず、助ける爲めに廣大の悲願より態々現はれ出てさせられた阿彌陀佛である。故に此の遣る瀨無き佛の御名を聞く一念に斯くの如き廣大の思召なりしかと氣づくなり、聞其名號信心歡喜乃至一念なのであります。

八

猶ほ法然聖人には折々此の類の御敎化がある。第一阿彌陀

佛の名號が諸佛の名號に優れさせてあるのは、諸佛の名號には本願が無けれども、阿彌陀佛の名號は本願の名號であるからである、との御教化がある。若し唯南無阿彌陀佛とある丈けならば、南無藥師如來でも、南無地藏菩薩も同じである。處が今阿彌陀佛の名號は「此の我が南無阿彌陀佛一つを以て十方衆生を救ひ遂げずには置かぬ」との選擇本願の名號であつて、其の本願より永劫修行の結果、既に阿彌陀佛と現はさせられたる其の佛の御名號なのである。故に曇鸞大師の『註論』の御文には、

不虛作住持とは、本法藏菩薩の四十八願と、今日阿彌陀如來の自在神力とに依る。願以て力を成じ、力以て願に就く、願徒然ならず、力虛設ならず、力願相府ふて畢竟して差はず、故に成就と曰ふ。

と。我々は「斯う仕度い、あー仕度い」と思ふ事は思ひても私共には實行する力が伴はぬ。又唯金持は有りても、夫れには「何うかして金を屆け度い」との願が伴はぬ故、何もならぬのである。處が今阿彌陀佛は、此の苦惱の我々を見て、此の者を何うかして救ひ度いとの願を起し、其の爲めに長々修行して、遂に其の願成就して、我々を助ける爲めに現はさせられたる方便報身のお姿なのである。此の者を救ふが爲めに、遣る瀨無き救ひの親が、一如の都より態々此の法界に法藏菩薩と現はれ、其の遣る瀨無き心を以て、此の我が親心を有りとある衆生に知らせて、救はずには措かぬとある廣大の思召なのである。故に十方の諸佛、觀音は觀音の利益を說き、藥師には藥師如來の願があるも、之は夫れ〳〵各種の方面より各種の御緣を結びてお慈悲に引き入れ下さる別願であつて、其の御本意はと言ふと、『大經』の中に

十方恒沙の諸佛如來皆な共に無量壽佛の威神功德の不可思議なるを讚歎したまふ。

と仰せられ、即ち十方の諸佛如來は、此の阿彌陀佛のお慈悲を知らせる爲めに、十方の世界に現はれ下さるのが其の御本意なのである。醫師は澤山ありて、夫れ〳〵一應の手術はするも、一應の手術では救はれぬ我々である。然るに其處へ飛び込んで、『其の者を救ふ妙藥が茲にあるぞ』とお知らせ下されたのが彌陀の本願なれば、十方の醫師は皆な聲をそろえて其藥を稱贊し、飽く迄十方の病人に勸めて下さる。即ち諸佛夫れ〳〵願はあるも、其の出世の正しき御本意は、斯く夫れ〳〵の緣を以て、其本師法皇の阿彌陀佛の本願を傳へる爲めに、御出世下されたのに外ならぬである。『正信偈』の中には又

如來世に興出したまふ所以は、唯彌陀の本願海を說かんとなり。五濁惡時群生海、應に如來如實の言を信ずべし。

とあります。

そこで最後に遠慮無く申しますに、要する處此の他力の敎えは、斯く當てにならぬ淺間しき世の中に、此の淺間しき者を飽く迄見捨て給はぬ親ありて、此の者を哀はれみて下さるといふ、此の親の心を聞く以外に、他に物は入らぬのである。も一つ言ふと、此の世の組み立ては如何などいふ世界觀の說明問題などは、一切他力には不要なのである。何と考えて見たとて、我々此世の總ての有樣は結局皆な業報より出來て居るので、之を何う努めて見た處て我々之より脫れる事は出來

無いのである。爾るに此の仕て見やう無き有樣を御覽下され、夫れが不愍と其の者を飽く迄お見捨て無き大悲の佛まし〳〵て、我々に斯の廣大の哀れみを加へて下さる、此の親の御親切を聞かせて貰ふ一つである。茲一つが頂かるゝ處て、最早や世の中に總てのものが入らなくなるのであります。

九

又次ぎには、

光明寺和尙云。欲回此雜毒之行、求生彼佛淨土者、此必不可也、何以故、正由彼阿彌陀佛因中行菩薩行時乃至一念一刹那三業所修、皆是眞實心中作。凡所施爲趣求亦皆眞實。又眞實有二種。一者自利眞實、二者利他眞實、乃至不善三業必須眞實心中捨、又若起善三業者、必須眞實心中作、不簡內外明闇皆須眞實故、名至誠心。抄要

之は前に一度お引きなされたる（前年度の講本にあてたる處）善導大師至誠心釋の御文の要點を、茲に重ねてお引き下されたのである。光明寺の和尙といふは、言ふ迄も無く善導大師の事を申すのである。善導大師が支那終南山の麓、光明寺にお出でなされし故、斯く申すのであります。先づ初めに

『此の雜毒の行を廻して、彼の佛土に求生せんと欲ふ者は、此れ必ず不可也。』

上來申すが如くに、佛が我々に向はせられての遣る瀨無き御慈悲を頂くが信仰なるに、我々の方より佛に向ひて、我々の方よりまことにし、我々の方より淸淨にして彼の佛土に往生仕やう、などゝ思ふは是れ雜毒の行である。毒雜りの行である。凡夫の此方が計らひてする雜毒の善である。設ひ人に親切するに仕ても、「自分はするのだ」との思ひがあつてする親切なれば、是れ矢張り毒雜りの親切であります。此の毒雜りの行によつて、彼の佛の淨土に往かうなどゝ思うても、夫れは必らず駄目であるとお知らせ下されたのである。之は昨日も或方が頻りに信仰を得度い〳〵と苦まれて、日も當てられぬ樣に苦んでお出になる。其の樣子見て、私も優さしい話仕てゝは、其の方の心に通らぬ故、昨日私は「あなたは大變信者振りて居られる。外の方は家庭の內輪が折れ合はぬとかにて、其の自分の仕て見やう無き淺間しき心の上へ、此の仕て見やう無き自分を捨て給はぬお慈悲と頂かれる故、直に其の廣大のお慈悲にましませしかと喜ばるゝのであるも、あなたは唯信仰を得度い〳〵と、自分の淺間しい方は放つて置いて、大層信者振りて居られる」、と申すと其の方は「いや私は其のやうなことは毛頭思はぬ。今晩にも死ぬると思うて、一生懸命求めてるのである」と。そこで私は「いやそれてはあなたは地獄に行くのがいやだから、極樂に往き度いから、求めてるので無いか。皆んなが地獄に行くのがいやだから、極樂に往き度いから、信仰を欲しい、又今日靑年の人にすれば、信仰を得ると人格が高まるから信仰を得度い、信仰得ると活動が出來るから信仰を欲しいと求めてる」のは、皆な是れ雜毒の善、虛假の行である。だからあなたが何程求めても、あなたの

欲しいと思ふものは、佛の方より下さらぬ。子供が親に菓子を欲しい、金を欲しいと何程求めても、親は決して與へはして下さらぬである。親は汝菓子を求むるも、菓子を喰ふと胃を害する、夫れを親は知つて居る故、其の汝の爲め眞に爲めになるものを遣らうと言ふのである。汝に金をやると汝の爲めに善く無いから金を遣らぬ、此の金を愛する汝の心を哀れむ親の心を知つて呉れ、と仰せ下さるのである。此の我が財産は汝に金使ひさす爲めにこさえた財産では無い、其の金使ひする汝を救ひ度い爲め作つた財産故、金も遣る事はやるが、先つ此の親心を聞いて呉れ、と言つて下さるお慈悲なのである。故に此方より信心を得て、極樂に生れ度いなどゝ、そんな事は不可である」とお話した事であります。即ちゞが雜毒の行を廻して彼の佛土を求生するは、是れ必ず不可であるとお示し下さる處である。して其の不可であるは何故であるか、何故必ずいかぬのであるか。といふに即ち次に

『何を以ての故に、正しく彼の阿彌陀佛因中に菩薩の行を行じたまひし時、乃至一念一刹那も三業の所修、皆な是れ眞實心中に作したまひしに由つて也。』

此の「由つて也」を讀み違えるといかぬ。うつかり讀みぞこなうと玆は、「佛も三業の所修一念一刹那も眞實心中になし下されたのだから、我々も眞實心に仕なければならぬ、のである、爾るに我々、雜毒の行を以て佛に向ふからいかぬ」と取れるのである。すると、夫れでは此方よりまことで佛に向はねばならぬとなるからいかぬ。然うでは無く、玆は「其佛が長々因中に於て、一念一刹那も眞實心中になし下されたる其の造る瀨無き廣大の御念力を私へ下さるに由つて頂けるのである。此の佛のお慈悲は其の自力雜毒の仕て見やう無き者を助けると長々御苦勞の塊りのお慈悲なれば、此方から求める事ては是れ必ず不可である。此の仕て見やう無き者の爲め、三業の所修、皆な眞實心中になし下されたる其佛の御眞實に由り、如何な不眞實の私も有難うと頂けるのである」と御示し下されたのであります。て昨日講話後に今の方が懺悔して言はるゝには、「先き程先生より信者振りてると言はれた時には、最早や二度と玆へは聽きに來ないと思うた程であつたが、其の淺間しき私の根性を知り拔きて、其者を哀はれと仰せ下さるお慈悲と頂く時は、最早や得度いの得られぬのといふ信仰は無くなり、唯向ふより賜はるお慈悲でありました」と、深く喜ばれた。其の喜ばるゝ有樣は實に『行卷』の

明かに知んぬ、是れ凡聖自力の行に非ず、故に不廻向の行と名る也。大小の聖人輕重の惡人、皆な同じく齊しく選擇大寶海に歸して念佛成佛すべし。

とある御文通りである。總て佛の方より此の私が不愍と、一願一行も衆生の爲め〳〵と仕て下さる、此の佛の御廻向に由つて頂けるのである。即ち彼の佛が因中に於て一念一刹那も造る瀨無く眞實心中に作し下されたに由つて此方が頂けるのであります。て信心を得て活動しやう、人格を高めやうなどゝいふは、皆な是れ雜毒の善、虛假の行である。即ち此方は一行一善も仕て見やう無き、地獄は一定すみかの身なのである。其の仕て見やう無き身に、人格も活動も有るものか。其の下劣劣等の私を捨てさせられず、其の私の爲め廣大の悲願

を起させられ、飽く迄眞實心にして待ち兼ね給はる遣る瀨無き大悲と聞く一念に、我が身を地獄の底に投げつけて、廣大のお慈悲難有うと頂くのである。是れ即ち『歎異鈔』に

自余の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみがぞかし。

とある處であります。

一〇

次に

『凡そ施したまふ所、趣求をなす、亦皆な眞實なり。』

「佛より施して下さる所、私共が皆な趣き、求め頂戴する、夫れが皆な眞實心のお施し故、頂く處も亦皆な眞實である」とお示し下されたのである。是れ佛が我々にお慈悲を屆くると、遣る瀨無く御苦勞下さる處であります。こは趣求といふは、設へば學舍の求道の文字でも、『大經』に、

譬へば大海を一人升量せんに、刼數を經歷せば、尙ほ底を窮めて其の妙寶を得べきが如し。人至心有りて、精進に道を求めて止まずんば、會ず當に尅果すべし。何の願か得ざらん。

とある處より、當初名をつけた時は、一人づゝても信仰に入り下さる時は、結局社會全體が信仰に入る事になると、其の意てつけたのである。處が來て下さる人が、皆な道を求むる〳〵と來らるゝもの故、趣求が自力の趣求になり、自力の求道になる。「これでは困つた、名を代へんならんか」と一時は思うたのでありますが、さて考へて見ると、「大海を一人升量せんに……當さに尅果すべし」とは、法藏菩薩が世自在王佛の前に於て、私の爲め道を求めて下された時の言葉である。法藏菩薩が我々の爲め道を求めて下されたとなると、求道が他力の意味となる。即ち趣求は佛が我々の爲め施して下さる所より、我々に趣求せしめて下さるのである。即ち趣求は我々に遣る瀨無きお心を屆けて下さる有難き處であります。次ぎに

『又眞實に二種有り。一には自利眞實、二には利他眞實なり。』

眞實に二種あつて、一には自利眞實、二には利他眞實である。自利眞實は自力の眞實であつて、利他眞實は他力の眞實である、即ち佛の眞實であります。

『不善の三業をば必ず眞實心中に捨てたまへるを須ゐよ。又若し善の三業を起さば、必ず眞實心中に作したまひしを須ゐて、內外明闇を簡はず、皆な眞實を須ゐるが故に、至誠心と名く。』

之なども親鸞聖人は讀み方を違へさせられてある。普通ならば、「眞實心中に捨つ可し」「眞實心中に作すべし」と讀む可き文なるも、夫れでは自利眞實になる故、親鸞聖人は「不善の三業をば必ず眞實心中に捨てたまへるを須ゐよ」と。即ち我々は、不善の三業を如何しても自分で捨てられぬ、欲覺瞋覺害覺を起さゞらんとするも、起る我々である。故に其の者が、他に有るては無い、今斯く其の仕て見やう無きを哀はれみて其者の爲に長々不善の三業を眞實心中に捨てさせ給ひたるその御心を用ゐさせて貰ふのぢや、とお示し下されたのである。

即ち佛が私の爲め斯く迄になし下されたる其お慈悲を頂くのである、とお知らせ下されたのであります。又若し善の三業を起さば、夫れは自分の方て善をするのでは無い、佛が眞實心中に作し下されたる善の三業を用ゐさせて貰うふのである。即ち佛の方で穢れをおとして下されたる着物を有り難うと着る處より現はれ出づる働きである。斯くして眞實心中に作し下されし所を須ゐて「內外明闇を簡はず」——內外明闇の區別なく、凡ての者が皆な此の佛の眞實心一つを頂いて、夜が明くの故に、其の廣大の御心を至誠心と言ふと仰せ下されたのである。內外明闇は、后に叮嚀に其の區別を擧げさせられてある。要するに世間の出家も在俗も、男も女も老も幼も、皆な此のお慈悲一つを頂くのだ、との御知らせであります。

一一

又次ぎには、

爾者、大聖眞言、宗師釋義、信知斯心、則是不可思議不可稱不可說、一乘大智願海廻向利益他之眞實心。是名至心。

之は今迄の處を引きくるめて御結び下された御文である。『大聖の眞言』といふは、言ふ迄も無く大聖釋尊の經文の事にて、玆では前記『大經』『如來會』の御文をお指し下されたのである。又『宗師の釋義』は、上にあげさせられた善導大師の御文の事を指されたのであります。即ち上の經文、釋義で何が明に頂けるとならば、次に

『信に知んぬ、斯の心は、則ち是れ不可思議不可稱不可說一乘大智願海の廻向利益他の眞實心なり。是を至心と名く。』

である。實に我々、此の世で互ひに隔て、爭ひをなし、彌々となれば一分一厘人に讓る事が出來ぬ、一點でも他に不愍の心が起るならよけれども、一點も其の心は起らぬ、仕て見やうの無き我々である。然るに其者の其の仕て見やう無いのが可哀想であるとは、實に不可思議、不可稱、不可說である。此の廣大の思召で無くしては、此の五分々々の生死の世の中に、迷ひの「きづな」の絕たれるといふ期は無い。嘗て或人は苦しみて何うにも仕て見やう無く、「誰れか一寸でも自分の心を動かして吳れんか」と言はれたが、其の如く行き當つては一分一厘、動かし難き私の心。爾るに佛は私の其の仕て見やう無きが、不便であると、之を一分哀れみ下されても駄目である、二分仕て下されても、私の心に貫徹せぬ、遂に私の頂ける迄飽く迄惠み、飽く迄眞實にやり通して下された此のお心は之を何んと言はんか。實に不可思議不可稱不可說、一乘大智海の廻向利益他の眞實心である。斯く長々しく聖人が、有らゆる言辭を連ねてお示し下されたは、此の心余り廣大にして、言つて見やうが無い故である。『和讃』には又、

彌陀智願の廣海に、　凡夫善惡の心水も、
歸入しぬればすなはちに、　大悲心とぞ轉ずなる。
彌陀の智願海水に、　他力の信水いりぬれば、
眞實報土のならひにて、　煩惱菩提一味なり。
本願圓頓一乘は、　逆惡攝すと信知して、
煩惱菩提體無二と、　すみやかにとくさとらしむ。

とのお言葉もあります。即ち此のお心は、是れ實に他力の窮

極、本願一實の大道である。釋尊一代の經說も、要する所此の佛のお心一つをお說き下された外に無い事となる。其の廣大なる、此の五逆十惡謗法闡提の私を見捨て給はず、他く迄人生の惡の根本を斷絕し下さる佛のお惠みの眞實である。故に此の佛の眞實心が至心であると、お示し下されたのであります。

一二

又次ぎには

既言眞實。言眞實者涅槃經言、實諦一道淸淨、無有二也。言眞實者即是如來、如來即是眞實、眞實是虛空、虛空者即是眞實、眞實者即是佛性、佛性者即是眞實。已上

さて斯く釋尊一代の經說中、苟も眞實といふは、此の廣大の佛の眞實の外無いとなる。故に此の度びは直に『涅槃經』の文を持つて來て、其の眞實をお說き下さるのである。即ち前に既に至心は佛の廣大なる眞實心であるとお示し下された故、『既に眞實と言へり』と言ひて、次に『眞實と言ふは、『涅槃經』に言はく、實諦は一道淸淨にして、二有る事無し』——眞實と言ふは、此の罪惡の者を見捨て給はぬ本願一實の大道の一つであつて、此の他に二ある事無いとお示し下されたのであります。又眞實と言ふは如來であつて、如來が即ち眞實である。又眞實と言ふは虛空であつて、虛空が即ち眞實である。玆に虛空とあるは所謂天空の意で無く、何とも名狀し難き絕對不二の佛境界故、夫れを虛空と表はれたのである。又眞實といふは佛性であつて、佛性が即ち眞實である。玆に佛性とあるは、即ち信心佛性の事である。玆に佛性などの文字ある爲め、古の學者なども之に縛られ、佛性とは我々の心の事であるなどゝ持つて來るのであるも、そんな事言ふ必要は更に無い。佛性とは此の惡人を見捨て給はぬ大悲の眞實が佛性である。此の十方衆生を見捨て給はぬ佛性でましませばこそ、我々の信心が頂け、生死を離るゝ本となつて頂けるのである。若し此の佛性でましまさずは、永刼凡夫が生死を離るゝ本は無いのである。故に眞實は何が眞實と言へば、此の遣る瀨無き佛性が眞實である。他のものは皆な假門である。『和讃』には

念佛成佛これ眞宗、　萬行諸善これ假門、
權實眞假をわがずして、　自然の淨土をえぞしらぬ。
聖道權化の方便に、　衆生ひさしくとどまりて、
諸有に流轉の身とぞなる、　悲願の一乘歸命せよ。

我々は自分で佛性開見などの出來る者で無けれども、此の仕て見やう無き者を見捨て給はぬお悲慈一つで、涅槃の華が開かせて貰へるのである。して其の廣大のお慈悲一つを頂きた時が即ち信心である。故に又

信心よろこぶそのひとを　如來とひとしとときたまふ。
大信心は佛性なり、　佛性すなはち如來なり。

との御示しもあります。

一三

最後に、

釋云不簡內外明闇。內外者、內者即是出世。

外者即是世間。明闇者、明者即是出世。闇者即是世間。又復明者即智明。闇者即無明也。涅槃經言、闇即世間、明即出世。闇即無明、明即智明。已上

こは先きの善導大師の「內外明闇を簡はず、眞實心を須ゐる」と仰せられた內外明闇の言葉を、聖人御自身に、『涅槃經』の御文によりて分けてお示し下された御自釋の御文である。こは大に意味のある御示しであります。即ち內と明とを出世であるとし、外と闇とを世間であると分けてお知らせ下されたのである。出世といふは即ち世間を離れて佛道修行に專らなる事、世間といふは、世間在俗の日暮しである。即ち眞宗に「たとひ商ひをもし、漁すなどりをもせよ」の御敎化は、玆から出て來るのである。即ち如來廣大のお慈悲は、鋤鍬を持ち、資生產業を營む上に喜ばせて頂くのである。親鸞聖人は玆て斯く善導大師が心の內外明闇を仰せられたお言葉を、態々『涅槃經』によりて註釋を入れ、法衣纒ふ僧侶でも、鋤鍬持つ俗人でも、他力には世間出世の區別が無いとお知らせ下されたのであります。又明といふは智明であり、闇といふは無明である。無明は我々凡夫の事である、智明は大小の聖者の事である。我々無明惑業の凡夫も、又智慧優れた智者聖者も、此の遣る瀨無きお慈悲の外には道が無く、此のお慈悲を頂く段に於ては、一味平等であると御示し下されたのである。『和讃』には又、

彌陀の報土を願ふひと、　外儀のすがたはことなりと、
本願名號信受して、　寤寐にわすることなかれ。

と仰せられてあります。而して此のあとに『涅槃經』の御文を引かせられてある。こは即ち『諸經和讃』にお示し下さると同じく釋尊一代の說法は、此の遣る瀨無き佛の大悲をお知らせ下さる外に無いとの思召より『涅槃經』を以て彌陀の本願をお示し下されたのであります。以上。(夏季求道會第四日第一席)

一、人間忿々として榮務を營み、年命の日夜に去ることを覺えず、燈の風中に懸して期し難きが如し。忙々たる六道定趣無し。未だ解脫して苦海を出づるを得ず。云何が安然として驚懼せざらんや。各强く健にして力あるの時に聞きて、自策自勵して常住を求めよ。(乃至)煩惱は深くして底なし。生死の海邊なし。苦を度するの船未だ立たず、云何か睡眠を樂はんや。勇猛にして勤めて精進し、心を攝して常に禪に在せ。(初夜偈)

一、汝等臭き屍を抱きて臥す勿れ。種々の不淨を假りに人と名く。重病を得れば箭の體に入るが如し。衆の苦痛集るに、安ぞ眠るべけんや。(中夜偈)

一、時光遷りて流轉す。忽ちにして五更の初に至る。無常念々に至る。恒に死王と、もに居ず。諸の道を行ずる者に勸む。勤め修めて無餘に至れ。(後夜偈)

―善導大師『禮讃』―

告白

二郎は死して活躍せり

秦　敏之

一　二郎の死

二郎は我家の次男である、今年一月には丁度滿七歲となつて、昨年の暮の二十四日には少し風邪の氣味であつたが終業式だといふのでつとめてといふよりは寧ろ元氣に學校へも行つた、翌廿五日もいつもの通り兄弟と羽根などついて遊んで居つたが、どうもよくないやうであるから其夜は早く床に就かせ、廿六日には醫者に見せた、始めは格別の事もないとの事であつたが廿七日には痳疹らしいとの事であつた。何分年末ではあり自分はシンガーミシン會社の營業を助けて每日横濱へ通ひ、朝は八時前に家を出て夜は早くとも午後七時に歸宅するといふ身分であるから、家庭の事、兒童の敎育は殆んど總て妻の手に任せてある。併し妻とても家庭の外にシンガー裁縫刺繡院の後見を爲し、且又自分の投資して居る日本實業商會の監督をして居るから隨分年末は忙しいのである、無論看護婦は雇入れた、又妻の母も同居して居る、殊に妻の母は孫を愛すること深きのみならず、ことし六十三ではあるが頗るまめ〳〵しく働いて呉れる、下女も三人程助けて居る、醫師は舊同窓の醫學士竹田六郎君である、自分や妻の忙がしいことも、家庭の狀態もよく承知し、又子供の體質は充分承知して、醫師として每日來診して下さる外に友人としての同情の籠りた世話をして下さるのである。又病症も痳疹との事故餘り心配もしなかつた、然るに三十日の夕方から二郎は喘息を併發して非常に咳込んで居るとの報を得たが其日も大晦日で年末の忙がしさに餘り注意してやることが出來なかつた翌朝は元旦である、諒闇の新年の寂しき上に、我家には愛子が床に就て居る、朝飯を濟ませて早速二郎の部屋へ往つた、病人の喘息は倍々烈しい、咳をする時の苦しみ方が悲慘である、自分は平日餘り子供の世話をしてやる暇がない、今日こそは親の誠を示してやりたいとの考が起つた、看護婦は二郎を抱へて居る、是は寢てゐるより苦しみが少ないからである自分は看護婦に代りて二郎を抱く役目を引受けた、看護婦は吸入、藥餌の世話をする、自分は抱きつゝ家族と共に色々の話をしてやる、折々は病人も氣が紛れてニコつき出した、自分の將棋などを引ッ張りて戯れもする、午後は醫師も見えた、樣子が大分よい、併し今晩は注意せなければならぬといはれたから更に一名の看護婦を增した、小供が喘息で死ぬことがあるかと醫師に聞た、先づ稀であるとの答に二郎は死なゝいものと決めてしまつた。

午後八時頃迄抱いてやつたが大分樂になつたやうで病人は寢むつた、妻と妻の母、大阪より來合せた弟と看護婦等に後を任せ、自分は翌日充分なる看護を爲さんとの考から早く床についた、病人も其後暫くはスヤ〳〵寢入つたさうである。

翌朝四時四十分頃に起出てゝ昨日の如く乘馬の稽古に出懸

けんと仕度を整へた、出かける前に老母に二郎の容體を問ふたが、相變らず餘り輕くないやうであるとの事であつた、氣にはかゝつたが、乘馬の教師が朝早くから起き出でゝ待て下さることを思ひ直して急いで出かけた。

牛込河田町に教師を尋ね、二郎の病氣といふ噂さをした後與へられた馬に乘り、四谷九段神田の方を廻はり有樂町の宅へ歸つて來ると入口に人力車がある、自分が邸内に入るや否や下女は出て來つた坊ちやんの御容體が餘程御悪いからお醫者さんが今二人來て居られると言つた、少し胸は動氣付いたが併し醫者が來て居て呉れる以上は喘息と痳疹であるから大したことはあるまいと思ひながらも、早々靴を脱ぎ馬を戸外に放して病室へ馳せ付けた、病室には多數の者が片唾を呑で居る、醫者は二郎を抱いて一生懸命に腹部などを叩いて居る二郎の目は奇妙に白んで居る、鼻の下には曾て見た死人と同樣の色が現はれて居る、ハッと思つたが最早言葉も出ない併しまだ毛頭死ぬとは思はないのである、醫者は頻りに二郎の體を動かして居るが二郎は最早ものを言はない、併し呼吸はまだ確かにありさうである、醫者は何にとかして呉れるのであらうと思つてしばらく之れを見て居つたが、どうも呼吸が一時止まつて居るやうである、さうして醫者は二郎を離して床の上に置いた儘、アーといつて火鉢の處に往つた、醫師は更に他の良法を考へて居るのであらうと思ひつゝ自分はどうですと尋ねた、醫師はもう駄目ですといふ、此答へには非常に動悸を起したが、更に念の爲に、駄目とは死んだことですかと尋ねた、さうです、之が醫師の返答である、此瞬間に於ける自分と妻及妻の母抔の情は迚も此境遇に接しないものゝ想像の出來ることではないのである、何んとか方法はないかと云ふ樣な問ひは何遍も繰返へされたが醫者は仕方が無いと頭を振つた、一座の無言は勿論である、二郎の兄弟姉妹の子供達が死んだといふことを聞いて連れられて來て泣出す、母親も泣出す、老人も泣出す、下女も泣出す、此間の人生の情態は實に悲慘なものである、自分は泣いたか泣かないか殆んど覺えないのである、兎に角自分は氣を取直して死んだとあるからは仕方が無いと思つて居る處へ、自分の店員の注意で葬式の仕度をしなければならぬといふことにも氣が付いたのである、葬式は何所にするか、通知狀をどうするか、葬式の菓子抔も誂へなければならん、僧侶は誰に頼むか等の事を問はれて、之れに答へなければならぬ程嫌なつらい事は無いのである、自分は斯かる事に答へるよりも兎に角二郎の事が考へたいのである。

嬶て看護婦がアルコールを以て二郎の身體全部を拭いた、痳疹で死んだといふのであるから警察署から檢疫醫が來る、いとゞ寂しき夕刻には棺桶が來た、着物を着換へさせて棺の中に寢させる、顏は少しも痩せてゐない、元氣な時の寢顏と少しも變らない、どうしても死んだとは思はれない、なにかの拍子で今一度ものを云ひはせぬかと思はれる、死因は唯喘息の痰の爲めに窒息したといふのである、若し何にかの拍子で痰がとれたら又呼吸を吹返へしはしないかといふ樣な考が斷えず起つて來る。

二　二郎に對する追懷

棺桶の中へは小學校に於ける成績表、豫て愛して居つた玩具なども入れるやうなことが起つて來る、妻は二郎の學校の成績が可なり善かつた事を話出す、又數學が善く出來ると云つて教師から幾度も許されて人より先きに歸つて來たといふ樣なことも話出す。自分は二郎が五人の子供の内で最も整頓深き子供であつたといふことを思出しもし又皆んなに語り出す。

曾て二郎の書齋で其抽斗を調べて見た時、二郎は其所有に屬する總ての物品を規則正しく仕舞つてあつたこと、又自分の物でなくても何にか家内で紛失して置き所を忘れた時に、若し二郎に知らないかと尋ぬれば、必ず二郎は知つて居るといつて之れを探し出した事、並に此子は將來必ず綿密なる頭腦を以て大事業家か若くは學者になるであらうと親心に自己惚れたこと、非常に正直なる性質であつたこと、學校には非常に勇んで往つた勉強家であつたことなど、思出し又語り初める、三輪車に乘つて門外で潔く運動して居つたことも目に映つて來る、自分が横濱へ出勤する時に二郎が近邊の泰明小學校迄自分と同行して往くことが稀にはある、其時は二郎が親と共に學校の門前迄往くといふことの嬉しさと自慢心とが顏に現はれて幾度か振返つて自分を眺めた事の愛らしき顏が生き〳〵と目に閃らついて來る、御通夜の話題は、斯かる事計りで持切りて居る、棺の前には唯線香が斷えず焚かれて居る、話しが切れると僧侶の讀經がある、線香も讀經も起り來る愚痴を抑へるには何等の效力はない、ふと妻の顏を見ると目は段々腫れて來る、顏色は非常に青くなつて居る、斯んな事では妻の健康が又どうてあるかといふ心配もある、從來の樂しき家庭は永久に作ることは出來ないと思ひ出した。

自分には五人の子供がある、男が三人で女が二人である、二郎は家内中何人よりも最も自分を愛して居つた樣である、同樣に自分も亦二郎を愛して居つたのである、自分は餘程子煩惱の方である、二郎は尤も可愛い子であるといふが、考へて見ると五人が何れもそれぞれ尤も可愛い子供である、兎に角自分は家庭の樂といふことには重きを置いて居る人間である、自分はシンガーミンシ會社の爲に此十年間働いた東京に居る時は毎日横濱の中央店へ出勤し夜に入りて歸宅することは前段説明の通りである遲い時は十一時十二時頃歸宅することもある、之れが年中の業務である、其外に必要が起つた時は日本全國の分店を巡回したり、視察したりすることがあつて留守勝ちである、併しながら若し東京に居る時ならば日曜だけは可成家族を率ゐて何れかへ散歩することに極めて居る妻及五人の小供及妻の母、時に依つては下女をも率連れて往くのである、之れは自分に於ても樂しく又小供も非常に樂しく思ふ處であつた、平生は小供等は兩親何れも忙はしい爲めに共に遊んで貰へないものと心得て居るが、日曜だけは兩親と共に遊ぶべき權利を以て居ると心得て居るのである、故に日曜の朝用事てもして居らうなら非常なる勢を以て兩親に外出を強請むのである、上野の動物園、淺草の花屋敷、大森、八景園、十二社、柏木の華淵園、隅田川堤、多摩川、横濱、鶴見、日比谷公園等は皆子供と共に是非共遊びに往くべき場所になつて居つたのである、又一昨年の春などは、全家族十

一人連れて名古屋、伊勢、奈良、吉野、紀州、京都、大阪等までも出かけた位である。

かくの如く家庭の團欒に重きを置いて居る自分であるから子供の攝生の爲には毎年夏期に子供と老人丈を海岸へ送ることをも勉めて居た。

斯の如く子供と共に遊んだことの機會が多い丈、今は涙の種も多い思ひ出もどうしても止まらない、妻の目は膨れ、自分の心臓が焦がされるやうになるのも無理はないのである。

三　心機一轉

多數の慰問者が來て呉れた中に、文學士近角常觀氏も來訪せられた、近角氏は曾て高等學校及大學時代には最も親しき學友の一人であつた、同氏は學校卒業後身心を宗教界に注いで殊に青年男女の間に南無阿彌陀佛の宣傳を以て目的として立つて居る人である。大學時代に於て同氏が信仰といふことの爲めに非常に煩悶し一時は精神に異狀を呈して居るとさへ友人間に思はれた人である。氏が信仰に入つてから此方同氏の憂鬱性は一變して非常に快活なる人となられたことは確に親しく接近したる自分の實見した所であり又多數の學友も皆知つて居る所である。

乍併自分と氏とは學校卒業後に於ける徑路を別にしたから時々同窓會等で會ふ外は餘り會ふ機會がなかつたのである。同氏は求道學舍を開いて毎日曜に學生の爲めに布教を爲し、又九段の佛教倶樂部に於て毎土曜日に講話を開いて居ることも知つて居るが其處にすら餘り參詣することは出來なかつたのである。有體にいへば自分は其處へ參詣する程熱心に說教を聞く必要を認めなかつたのである。自分も學校に居る時は一時宗教の事は熱心に研究して見た、佛教の各高僧の說法も聽いた又友人及信仰を說く人々等に就いて種々の質問をもしたが今一つといふ處で眞の安心立命といふものが到底出來なかつた。哲學的には佛の存在といふことも立證し得るかの如く思つたこともある、併し其佛には甚だ暖みがなかつた。又本鄕の基督教の中央會堂へも時々參詣をした、コーッといふ西洋人の自宅迄をも訪問して信仰といふ事に付て心から尋ねた事もあつたが、矢張人生に是非宗教が必要であるとは思はなかつた、考ふれば考ふる程道德の必要は認めたが、宗教の必要は認めなくなつて來た、今迄は宗教がなくては人生の世渡りは完全にやれないだらうと思つて、宗教信者になつて見たいと思つてあせつたが、どうも何だか宗教を求める程世の中が窮屈になつて、却て心苦しい、此儘で若し宗教信者となれば自分は屹度僞善家になるに違ひないと思つて來た、そこで寧ろ宗教の事は已後斷然口にせまい、信仰問題とかいふやうなことには寧ろ自分は近よらないやうにしやうと思つた、さりとて世の中の宗教家又は宗教信者を排斥する心はない、矢張宗教は社會の中で尤も高尙なる裝飾であると思つた、自分には宗教が信ぜられない、自分には宗教の信仰はない併し道德丈は堅固にやつて見たいと決心した、都合によれば身に法衣を纏ひ、口にアーメンを唱ふる人よりも僞善のない丈が、自分の方が優つて居るとさへ考へるやうになつた、自分は實業界に居るが世間は或は自分を墮落したかの如く思つて居るであらうが自分は少しも墮落して居ないつもりである、之を

考へると却て心が安らかになつて來た。宗教を研究した時には、阿彌陀佛はあるものであるか、ないものであるか耶蘇教のゴッドなるものはあるものであるか、ないものであるかといふことを考へる爲に實に心は苦しかつたが斯ういふ問題を考へる必要がないと極つて却つて心の煩悶が減つたのである。

偖道德さへ缺けてゐなければ宗教も必要はないといふ考へが起りてから、自分は第一職務の爲に忠實になることを心掛けた、自分は國家の一良民となりたいといふのを第一の目的とした、自分は名譽も利益も欲しいが、收得は自然の與ふる儘に任かして置くと定めた、自分の目的は一良民であるから、政治上の野心も離れた、何年迄何百萬の金持にならねばならぬとも思はない、自分は職務に忠實にして家庭團欒の樂を得た、餘裕あらば何か世の爲になることをしたい、同時に自分の生活の程度をも向上させたいとの望も益々強くなつた、兎に角死ぬ迄眞面目に働かんとの考へが強くなつた、人に對しても疚しいと思ふことが無くなつて來た、宗教の事は目に見えない事に屬するから餘程考へるに苦しかつたが、道德の事は人間としてすべき道を盡すといふ事のみであるから、頗る事柄が簡單である、從つて少しでも善事をすれば直ちに其功績が現はれるのであるから非常に愉快である、自分はもと〳〵癇癪が強い、成るべく此癇癪を押えやうとして起るべき癇癪を押え通した時は非常に愉快である。人間といふものは意地が惡い、夫故成るべく意地の惡いことをすまいと誓つて一日にても之れを成功した時は非常に愉快である、人間といふものは必要もないのに嘘を言ふことが多い夫故成るべく嘘を云ふ數を少くしやうと思つて少しでも成功した時は甚だ愉快である、實業界は墮落して居るものである、乍併實業界でも墮落せずに濟まさんと思へば濟むものであるといふ考を以て成るべく之れを實行するが出來た時は非常に愉快である、人は酒の爲めに身を亡ぼすといふ樣なこともあるが自分は其厄難は逃れて居るといふことを考へる時は愉快である、人は煙草の爲めに金錢を煙にして居るが自分は其金錢を何にか其外の有用なことにして居ると思へば夫が愉快である、自分は克己の精神を養ふ助けにと思つて冷水浴を初め之れが七年も八年も續いた、今日に於て大分健康が良くなつた樣に思へる、之れは愉快である、兎に角宗教といふ樣な六ヶ敷い問題でなく道德といふことだけに眼を注いて居るならば一事を爲せば一事だけが進歩したといふ樣なことになるのであるから心が甚だ愉快であつた、即ち自分は道德の點に於て幾分づゝでも進歩することが出來るといふ觀念を持ち同時に自分の家庭を顧みれば書學生時代に拵へた借金も今日ではなくなつた、又現在の生活は決して贅澤ではないが自分の身分だけに相當して必要なものだけは買取ることが出來る、又家庭は頗ぶる圓滿である、日曜日に、子供等と共に遊ぶことが愉快である、要するに此七八年間は精神上に於ての苦悶を除き、又財政上に於ての困苦をも知らず、唯日々職務に熱中して日曜毎に家庭の娛樂を貪るといふ狀況であつたから先づ〳〵一時の小康を得たものであつた、唯昨年義妹が亡なつた時には實に人生は意の如くならぬものであるといふ考を起したが、其後半年程經て年末頃に於ては其思も餘程薄らいだ樣であつた。

然るに本年は正月早々自分の一子を亡つた、亡した朝には左程にも思はなかつたが翌日に至つて悲みの情が一層増して來た、胸は昨夜から張詰めて心臓は焼取らるゝが如き感じをし初めた、身も心も共に甚だ苦しくなつて來た、殊に自分は棺前に居る時其所に居合せた人が室外に立去り、自分が獨り二三分間殘された時、却つて人の居ないことを喜んだ、夫は死んだ二郎の顔を獨り熟く〳〵見ることが出來たからである、顔を見ると同時に若し構はないならば今一度之れを抱いてやりたいといふ感念が起つた程であつた、併し其内に人が又澤山這入つて來たので是等の事は空になつた、妻も亦來つて目を腫して居る、訪問して呉れた近角常觀氏は棺前に於て讀經をして呉れる、吾等は之れを聽聞する、讀經が濟んでから妻は近角氏に對して宗教上の質問を初めた、家内の母は平生は宗教の事は頗ぶる冷淡であつた、兎角方角を心配したり、豐川稲荷を信仰したり、所謂現世祈りの人であつた、然し其母迄が今日は眞面目になつて近角氏の他力に關する説教を聞いて居る、自分は母が現世祈禱を專とすることはなんとなく心の内に於ては不愉快に思つて居つたがさりとて自分は又母を説付ける程の大安心を持て居るのではなく母が豐川稲荷拝を信ずるのは寧ろ誠心から出て居るのであるから、之を擊破する丈い勇氣がなかつた、確かに自分の信仰は母の信仰よりも弱かつたのである。

又妻も自分が曾て宗教を研究したといふので時々宗教上の質問をしたが自分の心の底に絶對に安心立命が無いのであるから此質問を受ける毎に自分の答の徹底しないのは勿論である、是等のことも非常に苦痛として居つたのである、從つて家内も亦宗教上に於ては安心の出來て居る人では無いのである、然るに今日は計らずも二郎の死に依て近角氏が來訪せられ、妻は渇したる者が水を求むる如き勢を以て質問を初めた、自分は之れを横から聞いて居つて少しの口添へもしたが其考の間違つて居る點を近角氏から指摘されて成程と感じたことが多かつた。

近角氏の話は別に珍らしい話ではないのである、同氏が其時話された事柄は曾て自分が大學に居つた時に諸方の高僧を訪問して聽いた説教と大差は無いのである、又妻も曾て自分と結婚しない前に其父が非常に熱心なる眞宗の信者であつたから常に連れられて説教を聽聞したそうである、然るに今日近角氏の説法を聞いて驚いたことは外でもない妻の目の腫が僅か三四十分の間に著しく減じたこと出つゞけてあつた涙が乾いたのみならず、悲みの相好が變じて非常に歡喜の相好となつた、妻の母も亦未來といふことには甚だ無頓着であつたにも拘らずけふは喜んで近角氏の話に何時の間にか瞑せられて仕舞つたやうである、自分も亦今朝迄は胸が焦げる如くあつて面も昨夜寢むりの足らざる爲めに非常なる頭痛を感じて居つたにも拘はらず、近角氏と暫く談語を交へた後は、頭痛は忽ち去つて非常に愉快の心を感じた、又不思議にも一座に列して居る慰問者にして曾て宗教抔を聞いたこともないと思はるゝ人が耳を傾けて之れを傍聽して居る、殊に近角氏が眞宗の和讃を引いて「彌陀觀音大勢至、大願の船に乘じてぞ、生死の海にうかみつゝ、有情をよばふて乘せたまふ」といふことを説明せられ、此世は決して安樂のものに非ず吾等の住む處は苦界であるといふことを説明せられた時、初めて自分は不完全なる處に住んで居るといふことに氣が付いたのである、又談話中、佛があるか無いかといふことの充分なる觀念の得られないのに困るといふ問題の出た時に、氏は若し自己の居る場所が眞に苦界であるといふことに氣がつき、此所に救濟の力あることを知らば其救濟する人に就て論ずる暇は無いではないか、例へば自分は谷底に落ちて四方を見ても殆んど助かるべき途が無い、何れも斷岸絶壁である、然るに上の方から一本の繩が下りて來たと假定せよ、此繩を認めた時に其繩を下して呉れた人は何ん人であるか、其繩を下す樣な人があるかないかと云ふ樣なことを詮索する暇は殆んど無いであらう、其繩を認むると同時に其繩に縋り付かんとするのが人情である、是等は自分は最早助からない場所に這入つて、唯一條の繩のみが自分を救濟してくれるといふことを知つたからである、彌陀の本願に信頼するいふのは之れと同じ事である、自分の住んで居る世界、自分の有樣を調べて見れば實に最早助かるべき途の無い非常なる場所に沈淪して居るのである、此際救濟といふ繩が自分の目の前に來たならば、此救濟の繩を垂れて下さる彌陀なる佛は果してありや否や、又彌陀なる佛の力強きや否やといふことを問ふ暇があらうか、佛の有無、彌陀の力量等を研究せんとするものは、未だ自己が限り無き苦界に沈淪して居ることを自覺しないからである、宗教の生命は自己の苦しき境遇を知るに初まるのである、釋迦如來は此世の有樣を説いて無常と云つて居る、此世を苦界と云つて居る、要するに之れに氣が付けば直ちに救濟の佛の光の有難さが分るのである、自己が便り無き奈落の底に沈んで居るといふことに氣の付いた時が、即ち佛の光の認めらるゝ時であると云ふことを聽いた時は、家内孰れも何とはなしに喜びの情に紛された事であつた。

之れより三人の涙が乾いて何んとなく愉快の光に照された、近角氏は其夜遽く迄法談をせられたが何れも皆有難き思をした。

此夜は多くの人が通夜をして呉れるから我等は皆少しの間一と睡りしたが、睡つてをる間も目が覺めて後も愉快である、此朝は顔を洗ひつゝ平生歌抔は曾て讀んだことのない自分の胸に計らず、左の如き腰折れが浮び出た。

けふよりは　うからやからと　もろともに
　　淨き光に　照らさるゝなり

此心は淨き光とは無論佛の光を云ふのであるが二郎の法名が恰も淨光である、淨光とは經文にある文句で、矢張彌陀の光を指すのである。今日苦悶の内に斯かる愉快と勇氣を得たのは、今迄は宗教の事と云へば他人の持つて居る美しき物といふやうに心得て居たが、今は南無彌陀佛は自分のものであるといふ事に氣がついた、自分は今日より佛の光の内に照し込めらるゝものであるといふ喜びの情を述べたものである、殊に二郎の法名の淨光にかけて佛の光を仰いだのは、二郎の死が決して意味なきものでないといふ事を深く感じたからである、聽いたことは別に昔と變つた事でもないに拘はらず、昨日近角氏の説教にて、斯くも佛の光は自分の爲めに照されて居る

といふことを感じ得たのは何んの爲めであるか、又一時宗教なるものゝ必要を餘り認めなかつた吾等が如斯忽ち宗教界の人となつたのは何んの爲めであるか、考へて見れば二郎が我々と親子の緣を結んだのも偶然でない、必ず佛の力に依て如斯因緣となつたのであらうといふ樣なことが感ぜられて來たのである、玆に至つて二郎の死といふものは悲むべき事といふよりは、實に吾等の爲めに偉大なる事をしてくれたといふ樣に感ぜられて來たのである、尙ほいへば二郎の死は決して悲むべきことではない、二郎は死に依て益々吾等の精神界に活躍して居るといふことが感ぜられて來たのである。

如斯感じ出す時は今迄沈みきつた心は忽ち活動し、今迄は目に見ゆゝ人世のみを以て世界と心得て居つたものが、廣く際り無き世界に住んで居る自分であるといふ樣に感じて來たのである、ふと忘れて二郎の死を思ひ出すと、又悲しくなる、此時佛の光のことを思出せば氣も廣く心も愉快になつて、恰も青海原に大船に乘せられて愉快に浮かんで居る樣な氣持ちがして來るのである、どうしても二郎は死んで居ない、どうしても二郎は我家に活動して居るといふことが堅く信ぜられて來たのである、此事は二郎の遺骸を送つた葬式の席上に於ても自分が立つて來會者に對し、御同情は有りがたいが、皆さんが想像して下さる程、吾等は悲みの情に沈淪して居ないといふ挨拶をもした程である。

四　無常を感ずるは厭世に非ず

自分は曾て學生であつた時一時非常に熱心に宗教を研究したが其後殆んど忘れたかの如く宗教界の事を談じ、宗教界の事を評するのを止めたのは何んであるかと云へば、宗教は男女青年の間には活氣を與ふる事が少いものである、但し宗教を信じた人の中には僞善家も澤山あるが、又善い人も澤山ある、故に宗教なるものは人生の裝飾として必要なるものであるといふ位の考てあつたから、宗教に依て人が慰安を得るとか、人が活動するとか云ふ樣な事はどうしても信ぜられなかつた、何となれば活動は宗教なくとも出來るからである、已に宗教は自分には餘り必要品となつてゐないとすれば宗教を熱心に信ずる人を見て一種の迷信家であるといふ位にしか思はれなかつたのである、乍併今日に於て顧みれば實に自分は淺薄な考を持つて居つたのである、自分の淺き智慧を以て宗教の不可思議なる事を推測し、之れを判斷し得たかの如く思つて居つたのは實に耻かしい話である、今日の如き世の中に於ける吾等は、恐らく自己の力で助かる事は出來ないといふことは明瞭である、唯偉大なる他力に依らなければ到底安心の途はないのである、堪へがたき苦痛を救ひ非常なる大愉快心を與ふるものは偉大なる他力である、偉大なる他力とは南無阿彌陀佛である、今迄宗教中殊に眞宗は無常を說く事甚しきが故に、人心を弱からしめ厭世の心を強からしむると考へたことは迷妄の甚しきものであるといふことも分つた、無常と知つて其中に强き光を認めた程心の沈着いて居るものはないのである、無常の世の中にあつて無常の事實に遇ひながら其無常を知らず、却て眞宗は厭世教である、吾は世を樂觀するといふやうな學者の聲は、恰も單身一刀を提げて百萬の敵陣に飛込だのと同樣である、其勇氣丈は立派なやうであるが、敵は

之が爲に少しも恐れない、學者が人世を樂觀しても無常の萬敵は學者の孤立を笑つて居る。

無常は人生の事實である、如何程樂觀しても無常は無常である、吾等は實に一寸先が見えないといふのが眞である、昨日迄は家庭の圓滿に目が眩み、衣食に窮せざるが爲め、安心を爲して此人生に大滿足をして居つた我家庭も、今日は遠慮なく無常の大敵に侵入せられた。目を開けば人生は決して常住なるものではなかつた、常住でない證據は統計に依つて見ても年々多數の人が死んで居る、年々多數の人が病人になつて居る、昨日名聲ある人が今日は零落して居る、如斯狀態を眼前に見ながら尙其狀態の眞想を自分の身に感ずることが出來なかつたのである、然るに二郎の一死は此人生無常の狀態を親しく自己に感ぜしめたのである、之れを以て思へば我家の二郎は死して倍々活動して居るのである、我家は今日より後は二郎の活躍に勵まされて活動せんとしつゝあるのである、無常を知りて而も活動の出來るのは何の爲であるか、偉大なる他力の佛光に照されたからである、無常を知りて悲めば大厭世となるは勿論である、無常に驚いて他力の佛德によれば大活躍は自然に伴ふのである。

偖眼を轉じて世界の人を觀れば矢張吾等と同樣の事情に陷つて居る人は無きか、自分は二郎を亡ひたる後に多數の慰問者を受けた、自分の二郎を亡つた話と同樣に多數の慰問者の中には矢張悲慘な目に遭つて居る人が澤山あるのである、而してまだ夫でも人生の無常が分らずに唯苦悶に苦悶を重ねて居る人も澤山あるのである、斯かる人はなんとかして一日も早く佛の光に觸れしめたいものである、人生の苦悶を慰藉するものは唯佛の光である、唯佛の惠である、如何に地位ある人と雖も如何に金力ある人と雖も矢張無常の世の中に住んで居るのである、而して世に時めく人程此無常の人生が分り惡いのである、例へば世に時めく桂公とか西園寺侯とかいふやうな人は果して靜かに人世の無常を觀察することが出來るであらうか、後藤男爵の樣な流行子になつた人、內山田の井上侯の如き財界に特殊の勢力を持てゐる人、山縣公の如く陸軍に大勢力を振廻はす樣な人は恐らく此世の權力に目が眩んで無常の狀態を觀測する機會と暇が少いことであらうが、乍併矢張是等の人達も無常の世の中に住んで居るのである、畏れ多くも九重雲深き邊りにも近く無常の大嵐があつたではないか、無常は單り日本の天地に吹荒むのみでない、歐米の有名なる人物の家庭をも荒して居る。

折角此世に於て名譽若しくは富貴の身となりながら今一つ見るべきもの知るべき事の殘つて居ることを知らずして死ぬ人があつたならば之れ程不幸なことは無いではなからうか、ルーズベルトが大統領をやめて亞弗利加に猛獸狩をやつた、而して各國の皇帝を驚かして歸鄉した時の名聲はどうであつたらう、米國人中同氏を尊敬しないものは殆んどなかつたではないか、而してルーズベルト氏も自から勢力の偉大なることを感じた、第三回目の大統領選擧にも自分の力ならば當選すると確信したのであらう、而も同氏の運命は全く反對であつたのである、如何に世界を動かす大人物でも決して一ヶ年後の事は愚か一ヶ月後の事も分ることとては無いのである、如

何程人生に於て德義とか慈善とか云つた處て、是等の慈善是等の德義は實に淺薄なるものてある、永久不變の慈善は唯他力救濟の力てある、若し斯かる永久不變の慈悲の光に照さるゝ如き幸があつたならばせめて是等の慈悲に報ゆる爲めに此世一生涯に於て成るべく虛僞に陷らない樣及ばん限り勉めるのが我等人間の義務てある。

斯かる事を此小冊子に書附けるのは若し二郎の活躍に依て我家に與へられたると同樣の幸福が何等の因緣に依て世の苦悶者に與へられはしないかとおもふからてある。

茲に一つ御斷りして置きたいのは自分が救濟の途を得たのは眞宗の法門即ち南無阿彌陀佛に依て得たのてある、佛敎にも各宗あり、又基督敎もあるのてある、聞く處に依れば基督敎に依て安心を得て立派なる事業をした人も澤山あるといふことてある、自分が茲に世を救濟するものは唯阿彌陀佛の力てあるといふことを云つたのは只自分の實驗からは、佛の力已外に自分を救濟する力はないからてある、決して他の宗敎を排斥する意味て云つたのてはないのてある、如何なる道に依つても救濟せられた人は皆幸福てあるのに違ひない、乍併自分には唯此佛の光、佛の力の一つに依りて救濟せられたから自分の實驗に依て世の中に救濟の途を與ふるものは佛の道てあるといふことを云つたのみてある。

又此小冊子は自己の知己友人其他二郎の葬儀に列席せられたる人々及先輩の間に頒布する積りてある、自分の友人の內には基督敎信者も澤山あるのてある、若し眞に基督敎を信じて安心して居る人が此書を讀まれたならば益基督敎が其人を安心せしめた有がたさを感ぜらるゝことてありませう、即ち此小冊子が各人の信仰心の刺激となれば此上なき友人への挨拶と思ふからてある、即ち佛敎信者も基督敎信者も之れに依て、其所信の宗敎を更に厚く信ぜらるゝ緣にもと思つたのてある、若し又佛敎及び基督敎の信者にしてその眞意を得られぬ人、若くは未だ宗敎を信ぜず宗敎を輕蔑して居らるゝ人が讀まれたならば兎に角人世の眞相に就て考一考して貰ひたいといふ希望をもつのてある、今日の世の中は學術の進歩した世の中てある人文も發達したと言はれて居る、乍併醫學を專門にしたものは法律に暗い、法律を專門としたものは文學に暗い、文學を專門としたものは理學は知らない、軍人は經濟を知らない、商人は道德のことを忘れる、と同樣に人間は此世の事を專門とする間に未來の事、宗敎の事を忘れて居るのてはあるまいか、宗敎といつても哲學上の講釋ではない、ゴッドの說明てはない、唯物論だの唯心論だのゝ哲學論てはない、一神論だの、汎神論だのといふ學者に興味のありそうな名目の陳列てはない、實際自分の頭の上に落ちかゝつて來て居る此宗敎を見ることを忘れて居ることは無いてあらうか、此事に夢の醒めるのは自分が病氣になつた時か、自分が死にかけた時か、或は自分の父母妻子が死んだ時位てなければ目が醒めないのが人生の常態てある、乍併家に死人が無くとも妻子眷族を亡はなくとも佛の光は矢張斷えず照して居るのてある、自分が病氣にならなくとも佛の目から見れば一切の有情は總て死に瀕して居る大病人の如き狀態てはないてあらうか、政治家が政治に奔走するのもよいが、人靜まつた時に宗

敎の問題を靜かに考へる必要はあるまいか、商人は終日利益の爲めに血眼になつて居るが人生は唯之れだけが問題てあらうか、兎角忘れ易いは宗敎のことてある、人間が履行し得る道德のことすらも閑却せらるゝのてあるから宗敎の事は尙更閑却し易いは尤もてある、さりとて宗敎は遠い處にあるのてはない、又少しも六ケ敷いものてはない、唯多數の罪惡を有して居る我身ながらに眞實慈悲の佛の力に縋るのてある、唯此縋り付き得られた心が即ち安心立命の境遇てある、既に安心立命が出來たとすれば人生に於て茲に一大變化が起つたのてある、人生の苦悶がなくなるのてある、人生の悲みも忽ち之れを拭去ることが出來るのてある、臆病の心も變じて勇氣の心となるのてある、殊に近來流行して居る此不眞面目なる人心は恐らく宗敎の力に依つて餘程眞面目になることが出來るてあらうと思ふ、今日の日本は頗ぶる貧乏に苦しんて居る、二個師團を增設する金が無いからと云つて日本第一流の政治家が血眼になつて奔走しなければならない樣な情けない狀態てはないか、斯かる貧乏は何にが生み出したのてあるか、若し日本國中五千萬の人間の眞面目といふ心になつたならば今日の樣な貧乏は忽ち去つて世界列國と肩を並べる樣になることが出來るのてある、何故に眞面目が富を生み出すか、眞面目なる者は決して怠けない、眞面目の者は決して時間の盜賊をしない、必ず誠實に其職務に勤勉する、之れより外に富を得る途は無いのてある、而して今の日本の狀態はどうてあるか先づ中以上の地位に居るといふ官吏はどうてある、僅かに大學を出て初めて高等官になつたといふ年若い人でも朝の出勤は九時ならば餘程早い方てある、十時若しくは十一時の出勤てある、判任官てすらも矢張九時半位から十時位てなければ出勤せない、雇の者てすらも冬は九時位てある、而して午後は三時頃に退出する、勤務時間中にも煙草を喫み茶を飲み雜談をする、而して是等の役人は皆國民が負擔し難い程の重き租稅に依つて養はれて居るものてある、若し官吏が南無阿彌陀佛の光に照されたら、今日のやうな怠けものにならないのは受合ひてある。

又近來は實業界に於ける諸會社の役員連中に不正なことをするものが多い、是等の事も矢張眞宗を厭世敎だと罵りて、自己の不明を自慢するやうになつた世の產物てある。

尙又今日の日本人には借金することを平氣な者が多い、自分の如きも曾て在學中は學資と妹の結婚費のために借金を習ひ、學校卒業以後にも借金して家計の不足を補つた、借金のある事は平氣て人にも話し又甚だ恥づべきことゝも思はなかつたのてある、乍併其後亞米利加に往つて中等人民の多數が借金する事を非常に恥として居る風習を見、又其國民は非常に勤勉なる事を見、又其國民が或程度迄は非常に眞面目なる事を見て、米國の富の發展の著しきは決して偶然てないといふ事を感じたのてある。日本人は米人を見て非常に輕卒てあると云ひ、非常に野暮てあるといふが、是は皮相の觀察てある、米人の中には一種云ふべからざる眞面目な態度がある、而して其因て來る處を尋ぬるに日本の靑年の如く宗敎を絕對に無視する者が甚だ少いからてある、彼等は遊技を愛すると共に又宗敎なるものゝ尊いことを知つて居る、彼等の社會は矢張

宗教なるものが根底となつて居る、然るに日本の社會は無宗教を以て根底とすることを非常に喜んで居る風がある、若し各人が宗教を信ずるといふ心さへ起れば日本は必ず之よりも大國となる事が出來る、日本の富の發展は各人が少しく宗教心を起す事に依て忽ちに發展するのである、何となれば眞の宗教心は勤勉の人を生み出す、五千萬の人間が勤勉の度を增せば平均毎月一圓より五圓の收入增加は何でもない、一人一月一圓の收入增加は一年六億圓の富の增加であり、若し一ヶ月五圓の收入增加は一年三十億の富の增加である、日露戰費の殘債二十七億を返却して尙三億の餘裕が出來るのである、桂さんの公債借替だの其他あらん限りの術策も、日本國民に至誠の心を植えつけない間は國債整理は困難である、若し國民全體が南無阿彌陀佛を信じたならば、國民の勤勉力は忽ちに增加する、然るときは大政治家と稱する策士なくとも國債は忽ちなくなるのである、況んや二個師團問題から內閣の辭職だの新政黨の樹立だのと大袈裟に騷ぐ必要はなくなるかも知れない、話はおもはず宗教の國家に及ぼす利益などに移りたが、兎も角人世の眞相は無常である、無常を感ぜないのは人生の忙さに依りて唯忘れて居るのである、激闘の最中には大な疵を受けて居るのも知らないと同樣である、自己の疵を自覺すると共に自分は忽ち失神するのである、此時自己をして失神せしめないものは唯永久の光である處の佛の力である佛の惠である。

終りに臨んで讀者に紹介したき事は本郷森川町に於ける近角常觀氏の求道學舍である、毎日曜の朝は同舍で說教をして居られます、又毎土曜日の午後から九段の佛教倶樂部に於て說教があるそうであります。玆に二郎が死して我家に活躍せる歷史を說いて佛の光の有難さを喜ぶ栞と致します。

何事人間生死忘
春花秋月說無常
休悲卒爾二郎逝
彼岸寄來淸淨光
釋淨光七七日に際し

父敏之誌

姪靜子へ與ふる書信

黃葉秋庭

赤松夫人の御逝去は實に痛歎の外無之父上樣始め皆樣御落膽嘸かしと御察申上候學舍に取殘されたる諸姉妹は申迄も無く兼て夫人の御薫陶に人と爲りて今は世に立てる幾百の姉妹方の悲歎不堪洞察候扨私も入京以來日々兼て敬慕したる信仰上の師友方に接して懇篤なる御引立に預り法悅三昧に日暮さして頂き居候浩々洞にも時々罷座談會にも列席胸襟を披らきて御話をさして頂き居候洞の佐々木曉烏多田藤原等の諸先生方は或は京都の大學に敎鞭を御執なされ或は御目坊にて御敎化等にて御面會を得ざるは誠に殘念に存候毎土曜午後には九段の說敎場にて近角先生の講話又毎日曜午前は加藤智學先生の講話有之候孰れも懇切なる御講話大概二時餘に涉り滿腔の熱血を灑きて說立られ候就中近角先生の御引立は一般に餘程

の感應を與へたる樣に見受けられ候聽衆はいつも格別多きと申す程にはなきも皆々感涙の中に敬聽致居られ候聽衆中には大學生及高等女學生も多數交り居候浮薄輕騷なる今日の學界にも矢張眞面目なる靑年有之かと賴母敷相覺申候其れに付ても長男深造が何時法悅の人と爲して頂ける哉と存じ此等の靑年が染々羨敷思はれ申候貞子は近角先生の御講話には每度缺席致不申益法悅に入つて呉れ候事何より悅敷存候。

却說私も指を屈すれば三十年前より淺からぬ御法緣に逢ひ來り近來は自ら法悅者を以て許るし念佛致來候處此度と云ふ此度全く三十年來の不心得に氣付かして頂き今更從來の虛僞迷妄に安んじ居たること懺悔の外無之候然るに今は之に代へて今迄とは打つてかはり心中の歡喜響ふるに物なく或夜などは一晩歡喜の涙に泣き明かし翌朝を待ち兒供の前で從來の不心得を懺悔致候其れに付ても御兩親樣及其許御信仰の模樣如何あらん哉と只管懸念に堪へず翼あれば今にても飛んで行き私の此の歡喜のありたけを打出して共泣きに泣いて貰ひたい心が湧かへり候孰れ其內には歸國の上皆樣の前で御內佛樣に年來の空念佛を謝罪さして頂く覺悟には候得共今は其迄が待遠くなり候まゝ廻らぬ筆にて不取敢此度私入信の徑路を書連ねて其許まで送り候まゝ御兩親樣へも御覽に入れ被下度候。

私が最初近角先生の御講話を聽きたる時劈頭第一私の胸中に大打擊を與へたるは左の數語であつた

普通世間に信仰を得たると思ふ人の心得を露骨に打出して見れば「我々は素より罪業深重の凡夫である併此罪業は少しも氣にかけるに及ばぬ罪業其儘で彌陀大悲の攝取にあづかるのである、稱名は大悲の鴻恩を感謝する報謝の念佛である」と之が普通信者の腰の据ゑ場である、如此信仰は根本がないから早晩壞はれて仕舞ふ、なぜなれば眞面目に大悲の御本願に對せずして自身の方へのみ目を付けて居て如來樣の方はぼんやりとながめて居るばかりである、其結果は罪業は罪業——救濟は救濟——如來樣は如來樣——と云ふやうな具合に三者が離れ〳〵になつて居る決して絕對他力の妙境に融合し居らぬ、其故御慈悲を悅ぶと云ふも偏へに私心で之を悅び報謝と云ふも義理一ぺんの心得で、私心を以て空念佛を唱へて居る殆ど自力の境界を脫して居らぬ。

靜子さん、此處でひとつ虛心瞑目して考へて下さい。而して其許の心得と此の數言との間に如何なる差違があるか考へて下さい。私は此の數言を聽きたる當時は殆んど近角先生を仇敵のやうな眼で見ました。先生は私の金城鐵壁とも賴みたる信念の根據地を奪はれました。私は先生に千仞の谷底へ蹴落されました。私の心は赤兒が慈母の懷から投出されて茫然自失して居る時の心でした。靜子さん其許も前の近角先生の數言を玩味されたら屹度私と同樣なる悲慘なる恨悔に陷るでしよう。併私は此の悲慘なる恨悔から今は大歡喜の境遇に引出して頂いて居る

私が近角先生から前記數言を聽きたるは本年一月十一日即ち第二土曜日九段の說敎場に於てゞした。講話の題は一念相續であつたと思ひます。其翌日からは朝夕煩悶の念湧出し一室を出でずして祖師の御聖經をあれやこれやと拜讀して見ても、胸中の紛擾は益烈敷、我は此儘で死んだら如何せんと。

夜分などは安眠も出來んでした。幾度となく近角先生に面會して此の胸中を訴へんかと思ふたれど。如此大問題が容易に解釋されるものでない。近角先生に打出すのは先づ先生の御講話を少なくも三四回は聽いてからにしやうと決心して、第三の土曜日を一日千秋の思ひにて待つて居つた。第三の土曜即ち十八日は來た。其日の題は「本願の自然」。先生は此日も相變らず熱心にお話しになつたが。私は先生のお話を聽くにつれて胸中の紛擾が不知不識解けやるやうな心持がした。併し歸宅して考へて見れば胸中の紛擾は依然として解けやらぬ。それから第四土曜日即ち廿五日には「涅槃と大悲」と云ふ題で染々聽かして頂きたるが。お言葉の中に信心は得るでなく得さして頂くのであるから如來樣に眞正面に向かねば駄目である、罪業がどうだの何がかうだのと自分の方ばかりに目を付けて居ては駄目であると云ふ數言が落雷の如く私の胸中に響き渡つた。此數語を聽きてより其からのお講話は耳にも止まらず。講話果てゝ歸宅するまでは夢中の如く、如來樣へ眞正に向く〻〻〻〻〻と此言葉ばかり心の中で繰返へし晩食も如何に食したか覺えず。書齋に入り。求道上の書を取廣けて見ても心は更に書籍の上に落付かず。唯々前の數言が心の上に浮ぶのみであつた。それから書籍も何も捨てゝ。どうしたら如來樣に眞正面に向はるゝであらうと考へ初めたら、又々其ればかり胸に浮び、寢ても眠られず、夜は段々と更けるばかり、寢床の中を轉輾反側して居つたが、いつとなく胸中に次の如き考が續々起つて來た。

嗚呼我が金城鐵壁と頼んで居たものは自力の巣窟であつた。自身は罪業の重荷を背負ひながら稱名の切符を以て極樂の門が通れると思ふて居つた。自身は罪業もあるが矢張多少人間の仕事は出來ると思ふて居つた。信仰を得た積りでヨイ氣になつて居つた。手製の眞棒で車を推して居つた。眞棒は折れながしであつた。生死海の斷岩絶壁を此の手製の眞棒で安心して居つた。時々如來樣をどんな物かなど殆んど謗法の極惡に陷入て居つた。

右の樣な考はそれからそれへと盡くる時なく、果てしなく湧出したが、爰で兼て拜聽したる其の仕方な者が可哀相であるなる御言葉が思ひ出された。そうであつたかと思ふが否。此の數日內胸中の紛擾は雲霧の晴れ渡たる如く解け去りて兩眼は歡喜の涙に滿ち手足踊躍するかと思はる。此時克々考へて見たら、さきにどうしたら如來樣に眞正面に向かはれるだらうと煩悶したが自身は今現に如來樣に向つて赫々たる其の御光明に包まれてをる。其御光明のお影なればこそ自身信仰の巣窟の奥まで見せて頂くのでなる。嗚呼勿體なや。私は其時左の御和讃を唱へて今迄の不心得を深く〳〵懺悔さして頂いた

無慚無愧のこゝろにて　自力修業はかなふまじ
彌陀廻向の御名なれば　功德は十方にみちたまふ

又

蛇蝎奸詐のこゝろにて　自分修善はかなふまじ
如來の廻向をたのまずば　無慚無愧にてはてぞせん

私は其晩泣く〳〵繰返し〳〵此の御和讃を唱へた。私は常に聖人が謙遜の御心て、無慚無愧の身とか蛇蝎奸詐の心とか申

さるゝと思ふて居つた。嗚呼常に如來樣に眞正面に向はせらる聖人の御心を知らなかつた。如來樣の光明に照され見れば聖人も私も同樣に無慚無愧の身蛇蝎奸詐の心である

嗚呼私は近角先生のお蔭で自力の巣窟から赫耀たる慈光中に引出して頂いた

靜子さん此處て歡異鈔第一章を感泣して拜讀して下さい。不思議の御一言が難有くてならんではありませんか。

南無阿彌陀佛

私は靜子さんに改めて忠告したい事があります。其れは新板の書籍を色々讀むもよいが、求道の綴込を出して眞面目に讀んて下さい。私は近角先生にお遇ひ申す三年前から求道は讀んて居ました。此頃三年前の求道を拜見して見るに私が此度受けた通りの御示敎は每號にチャンと繰返してある。其れに當時は近角先生は「くどい」な位に思ふて通り拔けて居て少しも先生の親切に接することがてきんてした。自心の心で御法の本を拜讀するのは駄目と云ふことを克く承知さして頂きました

又々胸算用の親玉とは思へと、歡喜の餘信前信後の心持を上下二段に分ち左に列記しました。

信前の心持

一頻腦の起るたび、信仰心を假り來りて之れを鎭壓せんと努力せしを以て苦痛を感せじ。

二外界の迫害に遭ふとき完全を外界に需めたりしを以て憤慨の念を生ぜし。

三御聖經其他信念に關する本を讀み又は法話など聞くとき、自己の思慮を以て測度せしを以て其の言句のみを見聞して眞意を解すること克はざりし。

四自己を觀察せし時自己心を以て自己心を點檢せしを以て過去も未來も與に闇黑。

五是非去就を決するに臨み自己の小智を賴みとせしを以て利害の計較に傾き、知らず識らず不公平に陷りたり。

六自己の妄念に役せられしを以て身體の健康を害し精神を弱む。

信後の心持

一頻腦の起るたび、之れぞ大悲御本願の基たるを思ひ反て感謝を生ず。

二外界の迫害に遭ふ時、大悲の慈光に照らされて見れば私も亦外界の一部分なることを感得するを以て矜哀の念を生ずるも憤慨の心起らず。

三御聖經其他信念に關する本を讀み又は法話などきくとき、他力の心眼もて之れを玩味さして頂くやうな心持あるを以て其眞意肝に銘して歡喜踊躍の情溢る。

四自己を觀察する時、他力本願の光明に照らして自己心を觀察して頂くを以て過去、未來與に明瞭、就中過去現在に渉りて自己の虛僞迷妄なること歷々として指すが如し、益大悲のやる瀨なき御心に泣く。

五是非去就を決するに臨み、他力の慈光に依りて自己を客觀的に觀察するを以て精神の恨悔をもなみして利害を顧みる等の事なし。

六他力の信念に養はるゝを以て身體健康にして精神旺盛なり。

七自力心を以て職務に當るを以て過あれば責任を免れんと欲し功あれば驕れり。

八自力心を以て一身を處せしを以て、順境に於ては懈怠高貢の心生じ、逆境に於ては失望落膽す。

九孤獨に居りて寂寥を感せし。

十病患貧苦に陷りし時病患貧苦を以て自己心の煩悶に禁ゆる克はざりし。

まだ色々あるけれど追々記送します

一週日程前瓶裏に搖みたる野梅室内の暖氣に催されて昨今ボツ〳〵開かける。開けるは星の如く、開きかけたるは碧玉を綴れるが如し。幽姿清香言說に絶す。床の懸物は昨年末上京に際し其許の父上に泣付いて割愛して貰ふた詩人鐵兜の幅なり。明窓の下端坐此の梅と詩幅とに對すれば、地下の鐵兜は微笑を湛へて我法悅の妙境を贊嘆せり。其詩に言ふ。

妙遭二春一物入二熙一熙。海立山搖彼一時
喝二起石一霜枯木衆一百花一香一裡講二唐詩一

嗚呼。幼にして儒に學び、壯にして西學を唱へ、老ひて禪に遊びたり。此間小智小能を賴み、人を罵り、友を恨み、妻兒

七他力信に基づき職務に當るを以て過あれば大悲の矜哀を思ひ、功あれば大悲の恩を謝す。

八他力信心に身を任すを以て、順境に於ては御慈悲を喜び、逆境に於ては大悲矜哀の御心に接す。

九孤獨に居るも大悲の身と與に居ますを知るなれば藹然たる法悅自然に湧く。

十病患貧苦に陷りし時病患貧苦を病患貧苦としておいて、別に大悲の他力心に安住す。

を慽み、名利の身に伴はざりしを悲み、病老の身に及ぶを恐れたり。樂みあれば苦み、喜びあれば憂ふ。實に我胸中は鐵兜の所謂海立山搖なりし。然るに今や彼も一時と、一笑に付する法悅歡喜の身となして頂きぬ。正是れ春物入二熙々一なり。鐵兜は妙と云ふ。我は不思議と云ふ。於是。決起して胸中の野狐古木禪を喝破して赫耀たる信後の光明を贊歎するの光景は鐵兜が百花香裡講唐詩と一般

私も瓶裏の梅花に代りて一偈を大悲の親樣に捧げました。

曲折幹如鐵。勵凌寒苦中
一陽來復後。馥郁作春風

歡喜踴躍中に筆を執り文言不揃候段は御推讀被下度何卒時下御自重益御法悅奉願上候。可祝

大正二年二月十五日　　老秋

愛姪靜子硯下

如來大悲の恩德は
身を粉にしても報ずべし
師主智識の恩德も
骨をくだきても謝すべし

雜錄

無慚錄

近角常觀

○行さき向ばかり見て、足もとを見ねば、ふみかぶるべきなり、人の上ばかり見て、我身の上をたしなまずば一大事たるべきよし仰せられ候。

○御慈悲じや〳〵と言ふて御慈悲を持ちかへて我身が人の爲に働ける樣に思ふて居るのが、大間違である、いつの間にや。ら佛の御慈悲を我物顏に傳道じや、求道じやと知らず〳〵の間に標榜することの勿體なや。

○聖人は小慈小悲もなき身にて有情利益はおもふまじとか、是非しらず、邪正もわかぬこの身にて小慈小悲もなけれども名利に人師をこのむなりと仰せられたは實に胸に徹する御教化である。實に名利の塊である、信仰を揭げて名利を賣る、無慚無愧の極である。

○慈悲に聖道淨土のかはりめあり、聖道の慈悲といふはものをあはれみ、かなしみはぐくむなり、しかれども、思ふがごとくたすけとぐることはきはめてありがたしとか、今生にいかに、いとをし不便とおもふども、存知のごとく、たすけがたければこの慈悲始終なしと仰せられたは、いかにもありがたい、人間の力にては毛一本動かすことも出來ぬ。

○十年二十年傳道して段々信仰が弘まる樣に思ふて居るが間違である。自分も漸々喜ばれる樣に思ふて居るのが自分を買被りて居るのである。年を經るに隨て自分の力のなきことや喜ばれぬことが分かるばかりである。眼前にあらはれて來る出來事は人のことではない、皆自分の心の有樣を面り見せて貰ふのである。

○我等は愛欲の塊である。名利の塊である。剝げるべき名利は剝がさるべきが當然である。自分の心を考へて見れば淺間布心を懷て居る、外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ、內に虛假を懷けば也、人を咎むることはない、我等の胸中は虛假不實の塊である、貪瞋邪僞奸詐百端にして惡性侵めがたし、事蛇蝎に同じ、凡そ世の中にありとあらゆる事の源は、我私の心である。

○一夕の失火に神田數千軒の人家が灰燼になつた、特に澤山の會堂が瞬く間に燒失して仕舞ふた、如何に堅牢なる建築も一夜の烏有に歸して仕舞ふたる有樣は實に火宅無常を面り見せて貰ふた、聖德太子の御遺訓の如く、世間虛假、惟佛是眞である、災害に罹れる人々に深き同情を捧ると共に深く自ら氣を附けて貰ふた、燒けも失せもせぬ寶は南無阿彌陀佛ばかりである。

○實に此頃は厭離穢土の感がしみ〳〵起る。そこに益々御慈悲の難有味を知らして貰ふ。世が當てにならぬところに、如來常住の光を仰ぎ、厭離穢土なればこそ欣求淨土の心も起るのである。

○人世は手離しになつたときに御見捨なき御慈悲ばかりが難

有い、名利やら、身體やら、境遇やら色々のものを杖として人生に立つて居るときは御慈悲ばかりを悦ぶことが出來ぬ、すべての杖をとられたときに唯南無阿彌陀佛一つばかりが杖である力である。

○人が臨終になつたときは實に此すべての杖をとられて獨生獨死獨去獨來、實に永劫の一人立である、此時汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らんと呼び掛けたまふが大悲の親樣である。

○此御慈悲一つが杖である、力である、地獄は一定すみかぞかし、生くるも死するも唯親樣の思召に打任せるばかりである、如何なる地獄の炎に燒かるゝも少しも避くべき言ひまいを持たぬ。

○入信の一念といふは此臨終を平生に取越すことである、即ち大死一番することである、かくて此御慈悲の網ばかりて一人立をするのである、人間愈の場合は御慈悲の力で此坂を安々と越えさしていたゞくのである、而して信後の生活といふは畢竟身體は生きながら此一人立の生活をすることである。

○一人立になつて居りながら、しかるに人間身體のあらんかぎりは、矢張身體を當てにする、他人を當てにする、周圍を當てにする、煩惱も起る、喜べぬ樣になる、急ぎ淨土へまゐりたき心もない。實に凡情の然らしむる所、煩惱のために狂はさるゝ所、しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫と仰せ下さるゝとき再び他力の悲願はかくの如きの我等がためなりけりと慚愧さしていたゞくのである。此に至りて他人を當てにすべきではない、周圍を當てにすべきではない、虛名を保たんとすべきではない、鞭笞を辭すべきではない、かくて向ふ樣から許して下さるが御慈悲である、護りて下さるが惠である。

○昔鴦掘摩といふ邪見の人が人を百人殺して其指を以て髮とせんとしたが、百人目に釋尊に遇ひたてまつりて釋尊の一偈頌の說法をきゝて、心即ち開悟して遂に釋尊の弟子となつた、其後釋尊に從て舍衞國に入りて分衞せしに、小童が群集して或は瓦石を擲ち、或は箭矢を射、或は刀杖を以て斫り刺し擊ちたれども、彼は忍辱の行をなし、少しも之を避くることをせずかつて自分が犯したる罪の事を思へば更に苦とすべきでないと深く懺悔した、而して釋尊は一人も人を殺さぬものとして許された、我等が信仰上に於ても亦同樣の覺悟であらねばならぬ、恰も罪人が斷頭臺に上りて死生を獄司の手に委ねたるが如くである、聖人が佛天の御はからひにまかせたまふべしと仰せらるゝも實に是である、かくてこそ轉惡成善の益もあらはれて下さるのである。

○鴦掘摩で思ひ出したが、歎異鈔に唯圓坊に對して聖人が人を千人殺せ往定は一定すべしと仰せられたれば、唯圓坊は一人も此身の器量では殺せぬと云ふたとき、みよ人は自分の思ふ樣には中々行へない、是殺すべき業因なきによりて害せざるなり、我心のよくて殺さぬにはあらず、また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあるべしと敎誡されたのは如何にも御尤のことである、誰あつて罪を犯したいとか殺さんとかと思ふものはなけれども、知らず識らずの間にいかなる振舞を爲すかも分からぬ、此點に於ては他人の罪惡に對して責む

ぶ口は持たぬ、何んとなれば境遇を同じくし、因緣を同じくしたらば全く自分自身のことである。

○信仰上から言へば他人の事は他人の事と思ふてはならぬ、自分の事である、併他人であらうが、自分であろうが、かくの如き罪業のものを憐みたまふ親心の徹したる一念はあやまりはてゝ、過去未來現在の罪惡も消滅し業報も感ぜぬ樣になるのである、實に我等は自他の別なく身を投出して懺悔をさして貰ふ、自分の不德不信の爲に有緣の人々に大悲の親心を傳へることが出來ず、如來の子を罪業の爲に泣かしむるは上佛祖に對して申譯なく、下如來の子を賊ふものである、無量劫阿鼻獄に墮つべきである。

○人が信仰に入りて喜んで下さるときはさも自分の力であるかの如く感じて、人が信仰に入らずして業報に苦むときは、自分の罪たることを慚愧せぬのが大間違じや、聖人は弟子一人ももたずひとへに彌陀の御もようしにあづかりて念佛申す人を我弟子と申すことはきはめたる荒凉のことなりと仰せられた、そして釋尊は阿闍世王の罪を引受けて汝罪あらば我等諸佛も亦罪あるべしと仰せられた。罪といふ罪は皆私共の罪である、作るも作らざるも罪體なり、思ふも思はざるも妄念なり、今時道俗たれか耳四郎に異らんやと仰せられてある。經に不淨說法無有慚愧と仰せられたは實に私自身のことである。

○しかし何處〳〵までも御見捨てないのが無限大悲の親心にてまします、願に呵こりて作らん罪も宿業の催すゆへなり、さればよきことも、あしきことも業報にさしまかせて、ひとへに、本願をたのみまゐらすればこそ他力にては候へ、本願をたのむばかり、念佛をたのむばかり、御廻向をたのむばかりである、和讃に蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ如來の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせん、無慚無愧のこの身にて、まことのこゝろはなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ、念佛申すのみぞすえとほりたる大慈悲心にて候べき也。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

雲接大師僧訓日紀曰。不レ敎二弟子一之訓。菩薩善戒經第四卷云。旃陀羅等及以屠兒、雖レ行二惡行一、不レ能レ破二壞如來正法一、不二必定墮二三惡道中一。爲レ師不レ能レ敎二呵弟子一則、破二佛法一、必定當レ墮二地獄之中一。爲二名譽一故、聚二畜徒衆一是名二邪見一、名二魔弟子一。

◉昨年中求道學舍信仰談話會出席人名

近角常觀。瀧澤三郎。長尾牧一。高橋藤作。須藤堅正。三須善太郎。加藤竹三郎。淺野孝之。高橋惠眞。蓮谷天然。清岡博見。野邊地慶三。葵見九。山名龍宣。小澤一。鈴木弘。鹿島徹慶。三浦庄三郎。牧田平太郎。田村富厦。佐藤直丸。坂口五郎。原卓一。谷口次三郎。矢部重藏。小松原耐三。津田又次郎。宇佐美英太郎。赤尾信敬。津田まゆみ。樺島章子。松島なみ。前田津那。佐藤規雄。梶谷婦喜。山名はなの。小林しづ。岡部たみ。丸茂むね。長尾かず。川村貞治。梅岡幸三。神谷三郎。笠木輔一。田中廣志。前本義和。村上義一。井口乘海。富田定祐。塚原秀峰。穐谷凌雲。野田はま。井口政能。岩田きく。長島して。中田ふさ。宇野はつ。島田けい。加藤てる。生沼きく。佐々木きくの。佐野川たね。奥野すゑ。中野みつ。青山ゑい。小出はや。姉崎ゑて。井上義孝。井上柳子。小林參三郎。石川藤四郎。森脇忠市。高橋要。井上龜太郎。草野壯次。今井慶之助。諏訪長丸。中原菊英。白井成允。本谷暢音。近角きゝ子。田村たね。佐々木よしゑ。片山しづ。片山さと。東らむ。近角伊惠子。自在丸きく。千田照子。阿部かずゑ。不破とき。田中はつゑ。今井ぬい。一森やす。高橋しげ。武田松枝。森岡秀。赤沼貫之。木山政枝。暉峻康禎。福田兵五郎。森山隆介。盛田達三。塚原いく。丸茂ふみ。清水かつ。唐澤みん。高橋君子。宮崎みね。中村寅之丞。片野鐵次郎。小川滋次郎。太田七造。加藤鐵太郎。飯尾文夫。貫三壽。平賀千代吉。五十香元進。藤島與仁。田村造酒三。小谷超旭。坂倉はま。原なか。中村もと。石川いく林宮喜。菊地清。布川ます。加島虎藏。武田慧宏。深井惠照佐藤浩。有田廣。麻生義之助。畑新次郎。杉村優吉。布川長次郎。增田八重。田中政之進。白髮文左衞門。秀島寛融。林あき子。碓井はる。土谷知之、關定次郎。角谷八三郎。平岡明。青樹政孝。岩尾鹽龍。河本猷藏。谷内正順。松本薫。京極逸藏。橋詰濱吉。寺田慧眼。藤島信太郎。沖鹽政次。木場了本。西本龍山。戸叶力造。木本操。川添榮之丞。小林早。辻口藤作。湊八重子。瓜生さかえ。岩井さん。數藤謹。柏原あき子。松下要子。松下郷。村上クマ。服部元。佐々木辰子岡田光子。莊司己亥。松本照子。松本千代。湊鉾子。吉田つと。瀧本つね。近角常音。竹鼻尙友。林龍三郎。和泉鐵次郎金成辨吉。中村五兵衞。盛田喜祖八。近藤時司。杉本周堅。喜多村純一。佐藤要人。井上法忠。佐藤昭。江間春。角谷すま。佐々木くに子。增野惣吉。荏原雅亮。矢島ます。青樹雅横矢雪。關二十郎。外狩顯章。本多清安。霜鳥節。尼子法雷伊藤鉦次郎　三枝あきえ。築山清智。石川佐久太郎。成瀨みね。長谷川わか。不破剛。近藤ゆう。松本忠子。長谷川春美立石仙六。野生司敬眞。碓井半二。志田熊七。原基。德永勝順。古野吉松。柿岡きの。佐本のぶ。暉峻義等。岡田ひさ。岡田みつ。志田はる。岡山善太郎。松崎壽三。桑門典。久保護男。堀勇吉。淺井田四郎。森口。松浦すづ。大佛衞。福田由次郎。寺田千里。今井せい子。緒方かよ。原美よ子。原冬子。山崎喜久。及能いそ子。小玉三五一。井口柳。鈴木花見澤よし。見澤ふく子。岡田悅子。中村米子。小倉よし。加藤花。深見やす。竹節はつ。小南英作。奈倉和嘉。金子悅淨小笠原德兵衞。青山達美。東虎次郎。深見因三郎。石垣りう荻野清太郎。小穴宗次。岡野秀一。栗崎賢告。花井しづ。荻野あい。宮下淺吉。角田俊雄。杉野きん。松本省六。鈴木稔原田三郎。北野義策　江頭六郎。三井光彌。植野勳。上口作次郎。竹内耕司。竹内まつ。謝花寛濟。橋本芳雄。小西金二谷保平。堤八重。谷口すま。白尾りを。大岡千枝。齋藤りん。中島彌榮。高島ふじ。青山ちゑ。杉野かね。石原くら。大野むめ。峠しのぶ。常盤大定　下川履信。植竹喜四郎　星平野權。池田和市。遠山利八。渡邊右義。井口良千代。八木しま子。

求道會館建築寄附金第六回報告

一金五拾壹圓也（第貳回）福岡　土曜會殿

内譯

金五拾圓也　熊本　堤友次郎殿
金壹圓也　福岡　同民子殿
一金參拾圓也　福岡　古賀ちと子殿
一金貳拾圓也　無名氏殿
一金拾五圓也　日本橋　清水かつ子殿
一金拾五圓也　福井　杉浦吉右衞門殿
一金拾圓也　在露　服部富造殿
一金拾圓也　前橋　上田定次郎殿
一金拾圓也　淺草　今井てふ子殿
一金拾圓也　陸中　梅津善二郎殿
一金七圓也（第四回）　同節子殿
一金五圓貳拾錢也　麹町　石山須磨子殿
一金五圓也　福岡　有田憲太郎殿
一金五圓也　山形　齊藤彌助殿
一金五圓也　新潟　忠作殿
一金五圓也（第壹回）　牛込　波岡茂輝殿
一金五圓也　神田　田村てう子殿
一金五圓也（第貳回）　府下　太田七造殿
一金五圓也　栃木　宮田太重郎殿
一金五圓也　山形　原善聽殿
一金五圓也（第貳回）　大森　新名民子殿
一金五圓也　小石川　碓氷貞文殿
一金參圓也（第貳回）　本郷　無名氏殿
一金參圓也（第貳回）　三重　柳川こずへ殿
一金參圓也　石川　吉藤寅龍殿
一金參圓也　秋田　城榮太郎殿
一金參圓也（第貳回）　麹町　岡部民子殿
一金貳圓八拾五錢也　山口　宇野先承殿
一金貳圓壹錢也　新潟　松澤鼎成殿
一金貳圓也　神田　同裕猛殿
一金貳圓也　福岡　佐藤よね子殿
一金貳圓也　石川　石原貞三殿
一金貳圓也（第貳回）　富山　谷内俊正殿
一金貳圓也（第貳回）　臺灣　由雄なを子殿
森榮五郎殿

一金貳圓也　栃木　鈴木龍司殿
一金貳圓也　本所　戸田市太郎殿
一金壹圓五拾錢也　福岡　山村改助殿
一金壹圓拾五錢也　日本橋　塚本方御同行中殿
一金壹圓貳錢也　山口　高木秀圓殿
一金壹圓也　山口　三井誠之進殿
一金壹圓也　新潟　今井仁作殿
一金壹圓也　靜岡　坪井安吉殿
一金壹圓也　日本橋　久能方御同行中殿
一金壹圓也　伊豫　本城チエノ子殿
一金五十錢也　石川　河上竹松殿
一金五十錢也　福岡　戸次さと子殿

總計　金貳百六拾壹圓七拾參錢也

累計金壹萬六百八圓五拾錢也

右之通リニ候也

大正貳年二月二十五日

世話人總代　長尾收一
會計監督　西澤善七

右深厚の御同情を以て御喜捨被成下難有奉存候玆に謹みて奉感謝候也

近角常觀

一、寄附金は振替貯金により東京市日本橋區田所町株式會社東京銀行振替口座東京參七九八番に御振込被下度候當方より差出し候以外の拂込用紙を御使用の際には其の用紙の裏面通信文記載欄に「求道會館設立寄附金」の文字及び「求道會館設立會計監督西澤善七」の宛名必らず御記入願上候

二、寄附金領取の節は近角常觀師より感謝狀を差出し且つ求道誌上に報告可仕候

三、寄附金は御都合に從ひ分告月賦數回寄附等何れにても宜敷候

近角常觀著

訂正補增　信仰之餘瀝
第貳拾版　定價 卅錢　郵稅 四錢　袖珍美本

人生と信仰
第參版　定價 卅錢　郵稅 四錢　袖珍美本
◎第一章 人生問題と信仰　◎第二章 悲觀思想と信仰　◎第三章 倫理力行と信仰　◎第四章 犯罪心理と信仰　◎第五章 社會問題と信仰　◎第六章 國家秩序と信仰　◎第七章 世界宇宙と信仰

信仰問題
第六版　定價一冊六拾五錢　郵稅 六錢

發賣所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六九六番
求道發行所

東洋大學
學生募集

●來四月新學年に付第一學年學生を募集す

●中學校又は之と同等以上の學校卒業生は無試驗にて入學を許す

●規則入用者は郵券貳錢を添へ申込むべし

東京市小石川區原町
私立東洋大學

近角常觀師序　鈴木龍司著

人信之經路

正價三拾錢　郵税四錢

九月一日發行

著者は宗教家にあらず、僧侶にあらず、たゞ現代に生活し、現代の空氣に觸れ、而も、所謂近代人たるに甘んずることを得ざる一青年也。

然り而して、筆をその幼時の記憶より起し、中學にありては儒教的理想と奮鬪し、無我愛を信じては、進むべきの行路を得、第一高等學校の三年を經過して、文科大學に學びては、所謂灰色の人生觀に滿足すること能はずして、張合のなき日暮しをかこち、遂に一事件に遭遇するや、今迄の修養的立場、主觀的立脚地にては、いかにするとも安住の地を見出すこと能はず、一切の思想を捨て、直ちに走りて、絶對他力の恩寵に浴し、佛陀切々の慈愛に泣くの狀、廿四年の心的經過と相待つて、一の飾りなく、有の儘に告白するもの即ち本書也。

哀心止むに止まれぬ欲求を持して、暗黑の裡に彷徨する眞面目なる近代的青年の苦悶の跡萬人の肺腑を衝いて、人をして思はず、佛陀の大懷に宿らざるを得ざらしむ。

世の理想なきに苦しむもの、人生問題の歸趣を得ざるに惱むの士に、是非一讀をすゝむ

發行所　東京本郷區森川町一番地　求道發行所
申込所　東京市本郷區春木町三丁目廿一番地　振替東京一六六九六番
發行所　東京市本郷區森川町一番地　森江書店

近角常觀編著書目

親鸞聖人の信仰　貳版　定價七十錢　郵税八錢　クロース綴

信仰之餘瀝要略　三版　定價五錢　郵税三冊迄二錢　施本用

冠頭　**唯信鈔文意**　初版　定價七錢　郵税二冊迄二錢　施本用

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

求道昨年度分合本　定價九十錢　郵税八錢

御都合により郵便集金法にて御注文に應じ可申候

申込所　東京市本郷區森川町一　振替東京一六六九六番　求道發行所

規定

一　本誌は毎月一回二十日發行とす

一　本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず

一　本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事

一　郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事

一　凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし

一　本誌の講讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事

一　回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事

一　本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵税一冊に付五厘

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

大正二年二月二十四日印刷
大正二年二月二十八日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
（振替口座東京一六六九六番）

東京市神田區
大賣捌所　東京堂
東京市京橋區
北隆館

前號要目

求道

◎正眞の宗敎

◎眞俗二諦の交渉　清水かつ子

序言

一　人生問題と信仰問題

二　信仰的實驗

三　信仰と道德

四　國家と宗敎

告白

◎眞の同情者　橋本芳雄

講演

◎『敎行信證』信卷三信釋　近角常觀

第四席　至心釋（法然聖人と親鸞聖人）

雜錄

◉矜哀善巧錄　近角常觀